
魔王な少年

ヤンヤン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王な少年

【Nコード】

N2632E

【作者名】

ヤンヤン

【あらすじ】

人間では無くなってしまった僕。^{ひと}恐怖の象徴。破滅の権化。立派な魔王になれるのか!?

プロローグ―始まりの日―（前書き）

初めての小説ですので、どうか暖かく見てやってください。

プロローグ―始まりの日―

気が付いたら、知らない場所にいた。冷たい石造りの床に描かれた、幾何学な文字から溢れ出す光によって照らされた薄暗い部屋だ。

頭がぼーっとしてよく考えれない。ここは、いったいどこなんだろう？

「……この少年が　なのか」

男の低い声が部屋に響いた。

驚いて顔を上げてみれば、見知らぬ恰好した男と女がいた。

「……どうやらそのようね。ちゃんと紋章もあるし、間違いないでしょう」

いったいこの二人は何を話しているんだろう。紋章？　まるで耳栓してる時みたいに聞き取りづらい。それに恰好だって変だ。男のほうは筋骨隆々でとにかくでかい。上半身裸でいるのはともかく、肌が人のそれとは違い、鱗のようなもので覆われているみたいだ。顔も爬虫類に近い。

女の人のほうは肌などは普通だし、顔だつてもものすごい美人だけど、なにやら尻尾らしきものが生えている。でも、何よりも印象的なのは、腰まで伸びた赤い髪の毛が、ほのかに輝いているところだろう。

しだいに視界が狭くなり、身体から力が抜けていく。

そこからは思い出せなかった。

改めて今自分の居る部屋を見渡してみた。

随分豪華な部屋だ。今乗ってるベッドだけでも僕の部屋くらいの広さがある。布団だって信じられないくらいふかふかだ。壁もあの石造りのものと違って、温かな色合いをしている。

「……?」

言ってみて、随分ひさしぶりに自分の声を聞いた気がした。しばらく考えてみたが、全く思い浮かばない。何もしないのも暇だから部屋を眺めることにした。

どれくらい、そうしていただろう。コンコン、と扉を叩く音がして、扉が開いた。

「……っ!」

入ってきた人物を見て、息が詰まった。その姿が酷く醜かったからだ。

潰れた鼻に、ボコボコの顔、髪の毛は殆ど生えてない。

身長は小さいみたいだけど、洋服から覗く腕や足はごつごつしていて、指は短く太い。

「おや、起きておいででした力」

「……」

僕が驚きで声が出ないのをよそに、その醜い人物(?)は台車を部屋に入れる。どうやら食べ物に乗ってるみたいだ。

「貴方は丸一日眠っておられたのでス。まずは食事をして体力を回復するといいでしょウ。消化によいものを用意しましタ」

そう説明すると、次々と料理を並べていく。

お粥のようなものに、スープと少量の野菜を添えたものだ。

料理の匂いで食欲がわく。体調はいいみたいだ。

食べたいけど、今はそれよりも大事なことがあった。

「…あ、あの！」

喉がカラカラで声が掠れた。

すつと差し出された水を受け取って一気に飲んだ。

「ありがとうございます。えっと、聞きたいんですけど、ここってどこですか？」

僕は一番の疑問を口にした。

でも、返ってきた返事には僕が聞きたかったことよりも、さらに重要な単語が含まれていた。

「ここは魔王城ですよ。『魔王』様」

心臓が、一瞬だけ強く脈動した。

魔王とは僕のことを言っているのだろうか。

あまり長くない人生だけど、十四年生きて一度もそんな名前で呼ばれたことはないはずだ。

じゃあなんで魔王って呼ばれてどきってしまったんだろう。

「自己紹介が遅れました。ワタシの名前はブルドと申します。身の回りのお世話をさせていただきますので、気付いたことがあったらなんなりと申し付け下さい」

なんだろう。自分に関係あるくせに、勝手に話が進んでいく。何を言えばいいかわからなかった。恐い。こいつはなにを言ってるんだ。胸がムカムカする。吐き気がする。背中に冷や汗が流れた。

「母さんは？」

やつのことで絞り出した声は震えていた。やっと出た言葉が『母さんは？』なんて情けないにもほどがあるけど、ただ無性に心細かった。なんだか自分がものすごく遠くに來た気がした。

早く帰りたい。一人でもいいから知ってる人に会いたい。ここは僕の居場所じゃない。考えれば考えるほど思考が空回りする。

世話ってナンダ？ アンタなんか知らナイ。ココは何処？ 魔王城なんかシラナイ。僕をカエセ。ボクのイバシヨヘカエセ。

「お、落ち着いて下さい、魔王様っ」

「うるさい！ 僕にさわるな！ 僕は魔王なんて名前じゃない！」

差し出された手を払いのける。ブルドが何やら僕の顔を見て驚愕している。

「…いつ！」

突如額に刺すような痛みが走る。痛くて押さえた右手を伝って血が流れてきた。

「なんだよ、これ…」

「これはいけない！ 急いで医者ヲ」

ブルドの言葉を無視して僕は部屋にある大きな鏡の前へ移動した。
心臓が早鐘を鳴らす。呼吸がしづらい。

自分の姿を見たら何かが決定的に壊れてしまう気がする。

そして僕は見てしまった。

鏡に映る自分の姿を。

鏡に映る僕の額で、あるはずのない『第三の瞳』が血の涙を流
していた。

有り得ない姿が鏡に映っている。灰色の髪、紅い瞳、そして。

「これ…誰？」

鏡に右手を伸ばす。血の手形ができた。

顔は一緒なのに、様子が全く違う。髪は染めたのかもしれない。目はカラーコンタクトかもしれない。でも、この『第三の瞳』だけは僕の常識で説明できるものじゃなかった。

不意に、扉が乱暴に開かれた。

「どうしたの!？」

あの石造りの部屋にいた女の人が、慌てた様子で部屋に入ってくる。

「そ、それが急に『魔眼』が開きました……」

どうやらブルドが呼んだらしかった。

「『魔眼』が？ まだ覚醒には早過ぎ　っ！」

鏡ごしに目があった。驚愕した顔。そうだ、三つも目があるなんて気持ち悪いよ。

鏡に映る額の瞳が、ぎよるぎよると高速で動く。
気持ち悪い。気色悪い。こんなの僕じゃない。こんな、こんな。

鏡に亀裂が入る。すでに血だらけだった右手から、さらに血が出た。血は紅い。鏡に映る僕の目と同じ色。視界が紅く染まっていく。世界が崩れていく。

ふと、体が温かいもので包まれた。一気に視界が戻っていく。僕は、あの女の人に抱きしめられていた。後ろから包み込むような格好。鏡ごしに、また目があった。決して気持ち悪い物を見る目じゃない、優しい目。そしてなにより、僕と同じ紅い瞳。

何故か、自然と心が安らいでいった。
あたたかい。

感じられるぬくもりが、荒れた僕の心を落ち着けてくれる。

自然と涙が流れてきた。

それから僕は、しばらく泣き止むことが出来なかった。

いつの間にか眠っていた。

夢を見ていた。

いつもと変わらない日常。

朝起きて、ご飯たべて、学校の準備して、母さんに遅刻するぞと怒鳴られながら登校する僕。

友達と馬鹿なことで笑って、気になる女の子と話すたびにドキドキして、まっとうな中学生生活をしている僕。

いつの間にか、僕は僕を見下ろしていた。

黒髪黒眼で、中学生にしてはちょっと小さめの僕。

そんな僕を見下ろしている『僕』は、一体なんなんだろう。

いや、そんなのわかってる。

魂が理解している。

今の『僕』は、『人間』を辞めてるのだ。

父さん、母さん、ごめんなさい。僕、魔王になりました。

プロローグ―始まりの日―（後書き）

なんだかへんな文章。

料理長ミーナ

あれから、三日がたった。

「魔王様。どうか食事だけでもおとり下さい」

毎日三食ブルドが食事を持って来るが、どうしても食べる気にならない。見た目は普通なのだが、何が入ってるかわからないし、全く食欲がわかないのだ。

「……」

布団に包まったまま無言の返事をする。正直な話、ブルドの姿を見るだけで怖くてしかたなくなるのだ。

「では、ここに置いて行きます」

そう言っただけで部屋から出て行く。

僕はいつたいていどうなるのだろうか。こうして食事を拒み続けて餓死するのだろうか。それともこんなお荷物は要らないと殺されるのだろうか。

そう考えて、体が震えた。

そうだ、僕が何時までも生かされる保障はないのだ。額に第三の瞳を発見した日の翌日のこと、この部屋に何人もの訪問者が来た。なんでも新しい魔王を一目見に来たらしいのだが、それはそれは恐ろしい人達だった。人間なんかをボリボリかじってそうなのもいたし、あからさまに威嚇してたのもいる。あの赤髪のお姉さんが止めてなかったら殺されていただろう。

…キィ。

びくうつと体に緊張が走る。微かだが、扉の開いた音がした。もしかしたら、誰かが僕を殺しに来たのかもしれない。

恐る恐る布団から目だけ出してみる。しかし、何も変わった様子はない。訝しく思い、僕は本当に扉が開いたのか見てみる。

「……………」

「……………」

目が合った。少しだけ開いた扉から、何かがこっちを見ていた。

「……………」

「あゝ」

はっとなつて僕は布団に隠れた。あまりの恐ろしさに止まってしまった。薄暗い扉の向こうに浮かぶ眼光に囚われていたようだ。

「あ、隠れないで下さい！」

足音が近づいてくるっ！ 自然と布団を持つ手に力が入った。

「聞いてます？」

声は想像以上に近くから聞こえた。どうやらベッドの横まで来たみたいだ。僕は渾身の力をこめて布団を掴んだ。

「せいっ」

「…あ！」

掛け声とともに引つ張られた布団は、僕の健闘むなしく簡単に剥ぎ取られてしまった。

自然と侵入者と向き合う形になる。・・・だが、僕の予想に反して侵入者はとても僕を殺しに来たようには見えない姿をしていた。

「魔王様。ちよつとくらい話を聞いてくれたっていいじゃないですか」

そういつて腰に手をあてて怒っているのは、どう見たって普通の人間の少女だ。それも同年代の。

「ぎ、ぎみあゝっ」

君は。と言おうとして失敗した。ここ最近水分も取ってないないから、喉がカラカラだった。

ずっと水が差し出される。

擦れた声でお礼を言って、僕はそれを一気飲みした。そして、改めて質問した。

「君は、誰？」

肩で切りそろえた黒に近い茶髪に、髪と同じ色の瞳。耳が少しがっつてることを覗けば、どう見たって普通の女の子だった。

「申し遅れました。魔王城の厨房を預かっています、料理長ミーナ

と申します」

そういつてお辞儀するミーナ。なるほど、確かにエプロンをつけている。でも、いったい料理長が僕になんの用だろうか。

「ちなみに、魔王様にお出ししている料理もあたしが作っています」
そう言つてこちらを窺ってくるミーナ。何が言いたいんだろうか。

「あ、ありがとうございます・・・」

とりあえずお礼を言つてみた。僕のために料理を作ってくれてる人がこんなかわいい子だとは思わなかった。だがしかし、どうやらミーナが聞きたいことはそんなことではないらしく、こめかみをひくひくさせて怒りを表現している。

なんかものすごい怒っているようだ。

どうしたらいいのかわからずおろおろしていると、ミーナの怒りが爆発した。

「魔王様！　あたしの作った料理を一口も食べずに残すとは、何事ですかっ！」

びしい！　と、ブルドが置いていった料理を指差す。そこには、すでに冷め切った料理があった。

「魔王様の体を気遣い、健康に良く消化にも良い、もちろん味は最高と自負しているあたしの料理を何だとおもってるんですか！」

「ひいっ」

あまりの剣幕に、つい変な声が出てしまった。

「それに、ここ魔界では食料は貴重なんです。食べ物を粗末に扱ってはいけません！」

「すみませんでした」

気づけば、僕は土下座をしていた。

なおも無言で冷たい目で見つめてくるミーナ。もうどうしたらいいのかわからないので、とりあえず床に下りて土下座しなおそうとしたところで、やっとミーナは許してくれた。

「わかればよろしいのです。では、一度料理を温めなおしてきますので、食べていただけますね？」

語尾にギロリと睨み付けてくるミーナを前に僕はただ肯くしかなかった。

料理長ミナ（後書き）

がんばがんば俺！

魔王について（前書き）

説明長いです

魔王について

「ごちそうさまでした」

結論から言つて、ミーナの作った料理はかなりおいしかった。なにが入ってるのかわからないと怖がる僕を押さえつけ、無理やり一口目を食べさせられたのだが、料理長というのはだてじゃなかったらしい。

「おいしかったですか？」

「うん。とってもおいしかったよ」

よかった。と可愛らしく笑うミーナ。本性はかなり怖いけど、普段の彼女はおとなしいようだった。そして、一緒居るとなぜかほっとできた。

そんなこんなでミーナと談笑していると、こんこんと扉がノックされ、赤髪の女の人が入って来た。

「フレイア様！」

ミーナが驚いた様子で立ち上がる。フレイアと呼ばれた女の人、ミーナがここに居ることに驚いているようだった。

「あら、どうしてミーナがここにいるのかしら」

「え、えつとですね、魔王様が食欲がないというので、し、心配して来ました！」

えらい緊張だ。どうやらこのフレイアさんはとても偉い人らしい。

「そう。でもその様子だともう大丈夫みたいね」

空っぽの食器を見た後、僕を見てフレイアさんは微笑んだ。僕は、顔が熱くなるのがわかった。

フレイアさんはゆっくりとした足取りでさっきまでミーナが座っていた椅子、僕の正面に腰掛けた。

「やっとあなたとゆっくり話ができるわ。今日はあのうるさい奴等は来ないから安心してね」

僕の目を見て優しく言う。正直こんな美人に見つめられるのに慣れてないから、ますます顔が熱くなる。うるさい奴等とは威嚇してきた人達のことだろうか。

「大事な話があるの。それは、あなたの話」

一瞬にして顔から血の気が引いて行くのが解った。

「魔王についての話よ」

魔王は魔王城にある魔法陣によって選ばれる。魔法陣は魔王たるに相応しい魂を探し、魔王城に召喚する。その効果範囲は異世界にまで及ぶらしい。そして、魔王になった者は強制的に魔族へと転生さ

せられる。

転生した魔王の額には瞳を表す紋章が現れ、その紋章は魔界を統べる力を持つという。

フレイアさんの話はそのようなものだった。

「その魔法陣に選ばれたから、僕に魔王になれっていうんですかつ」

僕は苛立たしげに言った。そんなわけの解らない物のせいで僕の人生がめちゃくちゃにされるなんて、勝手にも程がある。今すぐにも元の世界に帰してほしい。

正確に僕の言いたいことが伝わったのだろう。フレイアさんは言い辛そうにこたえた。

「実際のところ、必ず魔王にならなくてはいけないということはないわ。でもあなたは这个世界で、魔族として生きなければならないわ。それは絶対」

「なんでっ！」

テーブルを叩いて立ち上がる。そんな理不尽なことがあってたまるか。勝手に呼び出して、魔族に転生されて、さらにはもう帰れない？　もしかしたらという一抹の望みを打ち砕かれた僕の衝撃は尋常じゃなかったが、その怒りをなんとか現状把握のために押さえつける。

「くそっ。それで魔王にならなくていいというのは置いて、どうしてもう元に戻れないか、詳しく教えてよね」

「いいわ。まず、あなたを召喚した魔法陣については、実は何もわかっていないの。あれは初代魔王が創った物で、その役割は魔王に

なる器を持った者を召喚するといったことしか伝わってないの。何千年もの間解明しようとしてきてるけど、今だに解明の糸口さえ見つかってないわ。そもそも異世界なんてものの存在自体が不明なのよ。そして転生についてなんだけど、主に他の種族の者が魔族に転生するには、上位の魔族との契約が必要なの。そして元の存在に戻るには、契約した魔族が契約を破棄するか滅びるしかない。そしてあなたには契約した魔族なんてものが存在しない。おそらく、契約による魔力付加の転生と違って、元の存在自体が創りかえられたのでしょう」

詳しく教えてなんて言わなければ良かった。難しすぎて全くわからないじゃないか。もう一度、今度は易しく教えてなんて恥ずかしくて言えない。まあとにかく無理ってことはわかったんだ。次の質問へいこう。

「へへ、なるほどね。それで、魔王にならなくていいというのは本当なの？」

なんだかさつきから隣で直立不動だったミーナから「お前ほんとにわかったのかよ」的な目線が来るが今は真剣な話の途中、ここは無視だ。

「本当よ。実際、過去に魔法陣に召喚されて魔王にならなかった者達もいるの。でも、その場合は確実に魔界は戦乱の時代に突入してる。そしてその魔王にならなかった者達も皆殺されているわ」

「……」

飲み物を飲んで緊張でからからになった喉を潤す。ミーナが煎れてくれた紅茶は、とつくに冷たくなっていた。

これは魔王になるか魔界を戦乱に導いて殺されるかの二択ってこと
ですよ。魔王もしくは死亡ってことだよ。

僕の名前は（前書き）

ひとまずここまでがプロローグです。

僕の名前は

魔王になるか死ぬかを選ぶ前に、僕は重要な事実気付いた。

「ところで、フレイアさん…でいいんですよね？ いちおう確認しますけど、フレイアさんの話だと僕はまだ魔王じゃないってことですよね？」

それはフレイアさんにとって意外な質問だったらしい。

「そうよ。そういえば、あなたは召喚のことだけじゃなくて、魔界の常識も知らなかったのよね」

顎に手をあてて少し考えたフレイアさんだったが、すぐに頭の中の整理がついたようだ。

「実は魔王になるには、紋章以外にも条件があるの。でも紋章があればそんなものは無いも同然。だから今は気にしなくてもいいわ」

「そうですか…」

どうやらたいした問題ではないらしい。

結局、問題は僕はどうしたいのかということだ。

本音を言えば死ぬのは絶対嫌だから魔王になるしかないのだけど、魔王になって何をさせられるのが不安なのだ。魔王と呼ばれるくらいだから、きつとろくでもないことをさせられるに決まってる。虐殺とか破壊とか思い付く限りの悪事を働くのが仕事に違いない。そんなのは嫌だ。でもならないと殺されるらしい。

うーん。とあまりに長く考える僕に、フレイアさんは救いの一言を告げた。

「別に今すぐ決めなくてもいいのよ。魔王になるって言えばすぐ魔王になれるわけじゃないし、時間はあるから」

「えーっ!？」

そんな大事なことはすぐ教えてよ。頭の中で必死で自分に魔王になるように説得していた僕はひょうしめけしてしまった。

そんな僕の様子にフレイアさんは微笑むと、ミーナによっていつの間にか新しくカップにそそがれた紅茶を一口飲んだ。

「魔王になるかどうかを決めるまで、あと半年ほど余裕があるの。それまではこの魔王城に住んでもらうことになるわ」

僕は一気に体の緊張がなくなっていくのを感じた。全くたちの悪い話し方をする人だ。

なんだか淒く疲れた。

でも、これではばらくの生活は保証されたようなものだ。少なくとも半年はここに住むことになる。

「今すべき話はこれでおしまい。じゃあ私はそろそろ仕事に戻るわね」

席を立って部屋を出ようとするフレイアさん。

「待つて」

それを止める僕。

今聞いた話で、解ったことがある。それは僕は魔族としてこれから生きていくこと。そして期限つきとはいえ、ここで暮らしていくこと。

それを、ひとまず僕は受け止めることを決意した。

なら、まずはやることあるだろう。

まさか呼び止められるとは思ってなかったフレイアさんが、訝しげに振り向く。僕も椅子から立ち上がった。

「順番が逆になっちゃったけど」

これは受け入れるという意志表示。

僕は魔族の仲間になるといふこと。

「僕の名前はヤマト。これからよろしくお願いします」

そう自己紹介した僕にフレイアさんは妖しく微笑むと、今日見たなかで最も悪魔らしく笑いながら言った。

「ようこそ魔界へ。これからよろしくね」

第一章 一話：魔人アギト（前書き）

やっと本格的に魔王城での生活が始まりました。

第一章 一話：魔人アギト

魔界に来て、三十日がたった。地球なら一ヶ月がたったというのだろが、魔界には九十九日で一ヶ月ということになるらしい。一年は四つに区分されており、今は蒼ノ月四十二日らしい。といったように、ここには僕の常識が通じないことがたくさんある。僕は人生初のカルチャーショックを受けていた。

「…そして大魔王ウルディウスにより、竜王ファフニールは滅ぼされたのでス」

まるで学校の先生のように魔界の歴史を語るブルド。あまりに違う文化にとまどう僕は、ブルドに魔界について最低限の知識を習うことになったのだった。おかげで、もう生活するぶんには問題がなくなった。初めはブルドの外見にびびりまくって授業にならなかったのだが、最近ではもうなれたものだ。むしろ、その姿は別におかしいと思えるようになった。

「魔王様、ちゃんと聞いています力？」

「聞いてるよ。竜王を倒した大魔王ウルディウスは魔界を統一し、現在の形にしたんだよね」

はあ、とため息が出る。ブルドは細かい性格をしてるから、必ず先日の復習から始めるのだ。それでも近所では神童しんどうとして有名だったんだ。一回聞けば覚えられるのに。あと僕のこと魔王様って呼ぶのは・・・止めてくれないんだろうな。もう注意するのも疲れたよ。

満足気にうなずくと、ブルドは歴史の授業を再開した。

なんで異世界に来てまで勉強しなくちゃいけないんだろうか。僕はブルドの声を聞き流しながらそんなことを思っていた。

「終わったー」

そう言っただけは、魔王城にある食堂のテーブルに突っ伏した。

「あら、ヤマト様。今日はもう勉強おしまいですか？」

目ざとく僕をみつけたミーナは、紅茶を煎れたカップをもってくる。このやり取りも日常化したものだ。はじめの頃こそ、食べ物たぐいの類はブルドが直接部屋まで運んでくれてたのだが、まだ魔王になると決まったわけじゃないのにそれは悪いと断ったのだ。そして今ではこの食堂の常連。といっても、魔王城にはここしか食堂はないけどね。

「うん。午後にフレリアさんと約束があるんだ。それで今日は早めにね」

あー、癒される。なんだかミーナの笑顔を見ると頑張れる気がしてくるから不思議だ。本性恐くても見た目って大事だよな。ほんと、ブルドに断っておいて正解だった。

僕とミーナのほほんと会話をしていると、なにやら騒がしい音が近づいてきた。

「どうやら訓練が終わったみたいですね」

ニコリと笑って、ミーナは厨房に戻っていった。代わりに、たくさんのかついおっさん達が入り口から入ってくる。がやがやと騒がしく、金属同士のぶつかる音がする。剣こそ装備してないが、彼らの姿は明らかに戦闘用の格好をしていた。

「疲れたー！ 飯だメシ！ 肉持ってこーい！」

そのなかの一人が嬉しそうに大声で言った。

「はい！」

微かに厨房からミーナが返事をする声が聞こえたが、あまりに騒がしくて聞き取りづらい。さっきまで僕とミーナしか居なかった食堂が、今では部屋から溢れんばかりになっていた。

毎度のことながらすごい光景だなーと僕が思っていると、さっきまでミーナが居た席、つまり僕の正面に一人の青年が腰掛けた。

「よー、ヤマト。今日はお前も一緒か！」

どんつ。と音が鳴るほど大盛りに盛られたお皿を持ってきたこの青年の名はアギト。魔王城の兵士であり、魔人部隊を束ねる隊長であるという実はすごい人だ。初めてこの食堂に来たときも、僕が食事しているときに今と同じように魔人部隊の人達が押し寄せてきて、アギトとはそのときに知り合ったのだ。ちなみにさっき大声で叫んだのはアギトだ。

「うん。今日はこの後予定があるから早めに終わったんだ。アギトは食べ終わったらまた訓練？」

「あつたりまえよ。俺たちは魔王軍だからな。これでも魔人族の精鋭部隊、そんじょそこらのやつ等とは違って日々精進してんのさ」

にやり、と楽しそうに笑うアギト。なにが楽しいのか知らないけど、アギトはいつも楽しそうだ。粗野な笑顔に隠れてるけど、アギトは普通にしてればものすごく整った顔をしてる。恥ずかしくて言えないけど、強くてかつこよくて気さくなアギトは、僕の憧れだ。

不意に食堂に歓声が溢れた。アギトも待ってましたと言わんばかりに興奮してる。食欲をそそる匂い。ジューシーな肉を想像させる音。そう、メインディッシュの登場だ。次々と運ばれてくる巨大な肉の塊。そして僕たちの前にもそれが置かれた。

「おお〜」

十人前はありそうな巨大な肉。アギトは我慢しきれずにさっそく齧り付いた。僕も今すぐに食べたいけど、ここはひとまず我慢。もう少しの辛抱だ。

「おまたせしました」

振り返ると、ミーナが二つお皿を持っている。僕は、ぼんぼん、と隣の空いている椅子を叩いて、お皿を受け取った。

お皿にはパンや野菜などが乗っている。この食堂ではメイン以外はバイキングという形式になっているのだ。でも、何故だかは知らないけど、僕の方だけはミーナが持ってきてくれる事になっている。前に自分であつたら怒られた。

自然に僕の隣に座るミーナ。もうお決まりの位置だ。

「…うらやましいね」

アギトが恨めしそうに見てくる。そういえば初めて会った時も、こ
う言って絡んできたんだっけ。てか口から肉がはみだしてるよ。

魔人アギト（2）（前書き）

前回の続きです。そのうち一つにまとめるかもしれないです。

魔人アギト（2）

「ふー。食った食った」

満足そうにお腹をさするアギト。食堂は食い散らかされた食べ物によつて、悲惨なことになっていた。

皆、もっと綺麗に食べようよ。特にアギト。

「ヤマト様、そろそろフレイア様の所に行ったほうがいいんじゃないですか？」

ミーナが食器を片しながら言った。

「そうだね。そろそ」

「ちょっと待った！」

そろそろ行こうかな。と僕が言おうとしたのを拒んだのは、アギトだった。何やら真剣な表情だ。

「フレイアの、所に、行く、だと…？」

くっくく。と急に笑いだすアギト。いったいどうしたのだろうか。ミーナが変人を見るような視線を送っているのを、気にもとめずに笑っている。

「そうだよ。アギトは訓練だったよね。じゃ、僕はもう行くよ」

僕は無視してさっさと行くことにした。変質者には近寄らないよう

に、て小さい頃から育てられてきたからね。しかし、回れ右した瞬間物凄い力で肩が掴まれた。

「俺も行く」

「うわー」

今言ったのは僕じゃない。ミーナです。そんなことより、アギト威圧感やばいよ。いくらなんでも必死すぎるだろ。てか痛っ！ 肩が痛いっ！

「わかったよ！ ついてきていいからはなして！」

ぱっ。と肩を掴んでいた手が放された。あーあ、絶対赤くなってるよこれ。アギトを睨むが、まったく気にした様子はない。むしろ獲物を追い詰めたかのようににやにやしている。それすごい悪そうな顔だからやめたほうがいいよアギト。

「いてて。でもアギトはこの後訓練じゃないの？」

「大丈夫。食後の休憩があるから」

ちくしょう。そんだけ元気あるなら休憩いらないだろ。なんだか、このままフレイアさんの所についてこさせたら、やつかいなことになるそうだ。それはアギトの邪悪な顔を見れば明らかだ。どうにかならないかと、ミーナに助けを求めようとするが、なぜかさっきまで居たはずなのに居なくなっている。逃げたな、裏切り者め！ 僕一人に変人の相手押し付けやがって！

「…はあ」

僕はがっくりと肩を落とすと、諦めてフレイアさんの所に行くことにした。やっぱりこんな人にはなりたくないと思った。

第二話：魔法

重厚な造りのドアをノックする。

「ヤマトです」

「どうぞ」

返事はすぐに返ってきた。少々気が重いけど、ここは腹をくくるしかない。

失礼します。と言って部屋にはいった僕の視界に飛び込んできたのは、膨大な量の書物と、椅子に座って本を読むフレイアさんだった。

「呼び出してごめんなさいね。次期魔王であるあなたの場所に私が赴くのが本来なのに」

「いいえ、僕はまだ魔王になると決めたわけじゃないんですから、気を使わないでけっこうですよ。だから、僕のことは魔王とかじゃなくて、ヤマトと呼んで下さい」

「そう。わかったわ、ヤマト君」

上品に微笑むフレイアさんは、いつ見ても綺麗で大人な女性だ。この人に見つめられると、なんでもないのに恥ずかしくなってしまう。

「ところで、アギト將軍はどうしてここに？」

不思議そうに首を傾げるフレイアさん。そういえばアギトが居ることを忘れてた。先ほどまでなにやらぶつぶつ言っていたのに、部屋

に入ってから一言もしゃべらない。どうしたの・・・て、え！？隣を見たら、アギトがゆでだこのように真っ赤になっている。

「や、やあフレリア。ごごご機嫌う、うるわしゅうどうか？」

なんて不自然なんだ！動きもなんだかぎこちないし、さっきまでの悪巧み顔が嘘のように緊張した顔に変わっている。僕はこんなあからさまな態度をする人は初めて見た。

「相変わらず変な人ですね。あの、用が無いのなら、少し席を外してもらえますか？」

少し困った顔でそう告げるフレリアさん。アギト、君はなんて可哀そうな男なんだ。でもね、フレリアさんがそう言っただから早く出てけ。僕はまだ肩の痛みを根に持ってんだぞ。

「……はい」

がつくしと肩を落として部屋を出て行くアギト。その後姿はどうしようもないほどの哀愁に満ちていた。

「さて、それではさっそくだけど、魔法を使ってみてくれる？」

アギトが出て行くのを確認すると、フレリアさんは僕に無理難題をけしかけてきた。魔法を使えって言っても、どうすればいいのか僕知りませんけど？

「僕魔法なんか使えませんよ？」

正直に言ってみたが、なにやらフレリアさんは難しい顔をしてしま

った。

「おかしいわね。この本によるとそろそろ安定してくる頃のはずなんだけど・・・」

なんの話なのかさっぱり解らない。

「あの、どういうことなんですか？」

「実はね、この本には歴代の魔王について書かれているの」

そういつて手に持つてる分厚い本をぱらぱらとめくる。

「魔方陣で召喚されて転生した者の魂、精神、肉体はとても不安定な状態になるの。現にヤマト君も錯乱状態に陥ったじゃない？」

そういえば、確かにあのときは凄く精神が不安定だった気がする。でもそれは、いきなり知らない場所に来ちゃって、しかも魔族を初めて見てびっくりしたからじゃないのかな。それに額の瞳だって…

嫌なことを思い出して額を押さえると、額に当てた手をフレリアさんに優しくなでられた。そういえばあの時は抱きしめてもらったんだっけ。

思い出して恥ずかしくなった。

やっぱり錯乱してたからしょうがないってことにしておこう。

僕が額から手を放すと、フレリアさんは説明を再開した。

「そもそも魔法は精神力で生み出すもの、だから、転生した直後は無理でも、今頃は安定して来てるはずだから魔法を使ってもらって確認しようと思ったのよ」

おかしいわね。と本を読み直してるフレイアさん。どうやら、互いの認識に相違があるようだ。

「あのー、一応確認したいんですけど、僕魔法なんて使ったこと一度もないですよ」

僕の言葉に、フレイアさんは一瞬きよんとすると、え？　て顔をしました。

「でもあなた、魔王に選ばれる程の魂の持ち主なのよね？」

「そんなこと言われても、魂のことなんて僕はわからないし、使ったことが無いものは無いとしか言えないですよ」

「一度も無い…、それなら法術は？」

「その法術が何なのか知らないけど、とにかく魔法っぽいのは出来ませんよ」

どうやら衝撃的な事実だったらしく、フレイアさんは驚愕に目を見開いている。

どうしようかと悩んでるフレイアさんに、僕は提案をすることにした。

「とにかく、本来なら今頃は魔法が使えるはずなんですよね？　ならちよつとやってみるんで、どうすれば魔法が使えるか教えてもらえませんか？」

「教えるって言っても、私達は殆ど本能で魔法を使ってるから…
そうね、じゃあ今から私が魔法を使うから、何となくでいいから真
似してちょうだい」

フレイアさんが手を広げると、そこから小さな光の玉が発生した。
簡単そうだけど、どうしたらそうなるのか全くわからない。まあ、
何となくって言われてるし、どうせ魔法なんか使ったことがないん
だ。なるようになる。

僕は目をつぶると、自分の掌から小さな玉が出るのを想像した。そ
して、その玉が輝き出すイメージ。

光れ、光れ、光れ。そう念じていると、不意に温かい光を感じた。
恐る恐る目を開くと、そこには空中に浮かぶ小さな光。

「これが、魔法」

その光の玉に僕が触ろうとした瞬間。

カッ！

不意に視界全体をおおう真っ白な光。突然肌に感じる熱。一瞬光が
膨らんだと思ったら、爆発的に輝いたのだ。そしてすぐにその勢い
を無くした光は、何も無かったかのように消えてしまった。

「い…今のは、成功したんですか？」

反射的に目を隠した手を下ろす。

なんか明らかに暴走したっぽいけど、これでいいのだろうか。
フレイアさんを見ると、やっぱり難しい顔をして考えこんでいる。

「判断しづらいわね……。あなたの場合、暴走した理由がまだ身体が安定してないからなのか、それとも初めて魔法を使ったからなのか、あとは、精神力が魔力に追いついていけないからなのか、様々な要因があるからわからないのよね。全部、ていう場合もあるでしょうし」

うーん、それは難しい問題だ。どうやら魔王に選ばれる人は、魔法が使えて当然って人ばかりだったようだ。僕のように魔法を全く知らないというのは稀なんだろう。

でも、そもそもなんでそんなことを調べるのだろうか。もし不安定だったとしても、そのうち勝手に安定してくるものらしいし、別に放っておけばいいのに。

「しょうがないわね、もう少し調べてみましょう。ちょうどアギト將軍もいることだし、続きは訓練場でさせてもらうといいわ」

僕の思いはよそに、フレイアさんはそう言つと部屋から出て行ってしまった。

第二話：魔法（後書き）

小説を創作するというのは、すごく大変ですね。
自分の中でストーリーは出来てるのに、そこに肉付けをするという
のがすごくまどろっこしく感じます。

第三話：魔人部隊（前書き）

一度執筆したものを、大部分書き直したため、変なところがあるかもしれません。

第三話：魔人部隊

宙に浮く光の玉に意識を集中し、形を留めるように意識する。

「うまく出来るようになってきたわね」

フレイアさんの言葉通り、僕は光の玉を出すだけならばういぶん上達していた。どうやら、僕の身体はちゃんと安定してきており、魔法を使う分には問題無いようだ。

僕たちは今、訓練場にいる。ブルドから話だけは聞いていたが、聞くのと見るのでは大きな違いだった。とにかく広いのだ。訓練場と聞けば、広いと思うのは当然だろう。しかし、それは屋外での話だ。そう、驚いたのはここが室内だからだ。ドーム状に造られたこの空間は、石造りの王城の中にあるにはあまりに不自然だ。ブルドが言うには、この訓練場は魔王城が造られる前からあるらしく、詳しいことはわかっていないらしい。

その訓練場の片隅に僕は居た。少し向こうではアギト達魔人部隊が訓練をしている。光の玉を出すだけの魔法ではなく、炎や雷など、様々な魔法の飛び交う、僕にとってはまさに異世界な光景が繰り広げられているのだ。

正直な話、ここで魔法の練習なんかしてないで、じっくりと見学をしたい。

「ねえ、フレイアさん。ちょっと見学していいかな？」

そわそわと向こうに視線を送る僕に気づいていたのだろう。フレイアさんは苦笑いするとすぐに承諾してくれた。というよりも、どう

やら始めから見学させるつもりで連れてきたようだ。

魔族にとって、魔法を使うのが一番必要なのは想像力だし、実物を間近で見るのが一番勉強になるとのこと。

浮かれて走り出そうとした僕の背に、フレイアさんの爆弾発言が落とされた。

「それに、あなたにはこの魔人部隊に入ってもらうことになるしね」
ぴたっと僕の足が止まった。ああ、聞き間違いだろうか。でも、確かに僕の耳は聞き取ってしまった。僕が魔人部隊に入る、フレイアさんはそう言った。

「ど、どうしてそうなるんですか！　僕があそこに入るなんて無理に決まってるじゃないですか！」

僕は魔法の飛び交う訓練場の中央を指差す。アギトの指揮の下、数十人の魔人たちが、木剣を片手に模擬戦闘を繰り返している。その動きは皆歴戦の戦士を思わせるほど鋭く、繰り出される魔法は、一撃でも食らえば容易く敵の命を刈り取ることを想像させるほどの迫力がある。アギト自身が言ってた通り、彼らはz人魔族の精鋭達。とても僕が入り込めるような存在ではないのだ。

顔を青くして主張する僕に、フレイアさんはなおも言葉を続けた。

「ヤマト君、これはあなたの為でもあるの。魔王になるならなにに関係なく、あなたには戦う力が必要なのよ。幸いアギト將軍とあなたは仲が良いみたいだし、必ずヤマト君を強くしてくれるわ」

確かに弱っちい魔王なんてありえないし、魔王にならなかった場合も自分自身を守るための力が必要だろう。しかし、いくらなんでもいきなりこの中に入れといわれても無理だろう。自分で言うのも情

けないが、僕はかなりの貧弱者だという自身がある。
反論しようと口を開いた僕を、フレリアさんの言葉が塞いだ。

「わかっているの？ あなたには期限があるのだという事を。魔王になるのならともかく、違うのならこの城から出て一人で生きていかなくてはならない。でも、今魔人部隊に入っておけば、自分を守るだけの力は身につけられるだろうし、場合によっては魔王にならなくても魔王軍の一員として暮らしていくことも出来るかもしれないのよ」

完璧だった。僕はもう反論することもできずに、ただフレリアさんの言葉にうなずくしか出来なかった。

「ヤマトです。今日から魔人部隊に所属することになりました。よろしく願います」

ガチガチに緊張しながらお辞儀をする。目の前には僕を見る鋭い目の数々。やばい、ちびりそう。

ああ、見学するだけのはずが、まさかその場で入隊することになるなんて。フレリアさんと共に、見学の申し出をアギトにしにいったところ、僕がこの魔人部隊に所属することになったと聞いたとたん、善は急げとばかりに集合をかけて簡易入隊式を始めたのだ。

「ヤマトが魔王候補だというのは額の紋章をみりゃわかるだろうが、一切こいつを甘えさせないように！ 魔人部隊に入ったからには、

人魔族の誇りに恥じぬような戦士でなくてはならない！ グレイ、俺は向こうでこいつの腕を見るから、ここはお前が指揮を執れ」

「わかりました」

アギトはそう言うと言われ連れて移動した。後ろではグレイと呼ばれた隊員の指揮によってまた訓練が始まった。しかし、去り際にそのグレイに睨まれた気がするのはいさだらうか。

「アギト、あのグレイって人……」

「ああ、あいつは魔人部隊の副隊長だ。融通の利かないやつだが、まあいいやつだよ。そんなことより、お前には聞きたいことがある」

真剣な表情でアギトが僕は瞳を見据える。やはり僕が魔人部隊に入るなんて言うのは、どういう冗談だと言われるのだろうか。さっきはフレイアさんが居たから承諾しただけで、僕みたいな貧弱者なんてパシリでしか使い道がないなんて言われたりして。僕をアギトにまかせてさっさと居なくなってしまったフレイアさんが悔やまれる。

身構える僕をよそに、アギトは言った。

「……フレイアは、部隊の指揮を執る俺のやつこいい姿を見て、なんか言っていたか」

「……」

今あまりの予想外のことに理解するのに時間がかかってしまった。ああなるほどね、フレイアさんね。アギトに何を言われるか恐怖でびくびくしてた僕を前にして、フレイアさんのことを考えていたん

だね。君のその真剣な顔が余計に僕を苛立たすよ。

「…まじきもいって言ってたよ」

僕は嘘を言った。

第四話：違う世界

まじきもいという言葉の意味を説明すると、アギトのショックはすごかった。

顔は青白くなり、目には大粒の涙が溜まっている。小さい声で「何がいけなかったんだ…」と連呼するその様はもはやホラーだ。

「嘘だよ嘘。フレイアさんがそんなこと言はずがないでしょ？」

僕はそこまで傷つくとは思わなかったので、ばらすことにした。

「嘘？　ほんとか？　本当に嘘なのか!？」

必死に僕に確認をしてくるアギト。肩を揺すられすぎて、首が痛くなくなってしまった。

「お前、俺をからかいやがって、悪魔だな」

これは魔王候補に言うには悪口なのだろうか。

まあいい。とアギトは僕に木剣を手渡した。なんとも立ち直りの速いことだ。

持ってみると、意外に重い。木剣というからには、流石に相手を切るなんてことは出来ないだろうけど、これは十分相手を撲殺出来るだけの質量を持っているだろう。

とりあえず構えてみると言われ、剣など一度も持ったことがないので、なんとかそれらしく構えてみる。

「やっぱりお前、初心者だよな…」

はあ、とため息をつくアギト。やっぱりそういうのはすぐにわかるようだ。手合わせをするまでもなく、明らかに僕は初心者なのだ。これはなかなか大変そうだとアギトが呟く。

しばらく考え込むアギトだったが、結局今日はアギトが一对一で僕に指導してくれることになった。

「とにかく、今から俺に一撃を当ててみる。まあ無理だとは思っけどな。ちなみにごく稀に反撃もするぞ」

「わかった」

アギトは右手に持つ剣を構えるでもなく、だらりと力を抜いた状態だ。僕の構えを見てそれで十分と考えているのだろう。アギトは何も構えていない。

ただこちらを見るだけ。なのに、どうしても切りかかることが出来ない。動こうとする度に、何故だか圧迫感を感じて、抑えられてしまうのだ。

これはアギトの気迫に押されてるのだろうか。でも、目に映るアギトは、体中の力を抜ききった、やる気の無いような状態に見える。ならば、これは僕が尻込みしているだけなのだろうか。切りかかるどころか、誰かを殴ったことさえあまりないのだ。木剣とはいえ、構えてもいない相手に切りかかることを、無意識の内に拒否しているのだろうか。

わからない。ただわかるのは、目の前に居るこの男は、自分よりも遥かに強いということだ。

いつまでもじっとしているわけにはいかない。これは訓練なのだから。

僕は意を決して両手で剣を握り締めると、上段から思い切り振り下

ろした。
そして…。

まるで時間の流れが急激に遅くなったかのようにだった。

スローモーションのようにゆっくりと動く僕の剣を、アギトは少し体を横にずらしてかわす。

さらに攻撃を加えようと視線がアギトを追いかけた瞬間、アギトと目が合った。

その瞬間に感じる強力な圧迫感。先ほどよりも強烈に感じるそれに、ついに僕はその正体に気づいた。

心の奥底で感じ、無意識に体を強張らせ、自由を奪うその存在
恐怖。

終わった、と思った。

深い黄金の瞳。吸い込まれるようなその瞳と目が合った瞬間、僕は

自分の首が胴体から離れ、吹き飛ぶ光景が見えたのだ。

もしかしたら、僕の意識は一瞬無くなっていたかもしれない。気が付いたとき、僕の首はちゃんと胴体と繋がっていて、首元にはアギトの木剣が突きつけられていた。

途端に体中から吹き出る汗。体は震え、木剣は僕の意識とは関係なく地面に落ちる。息が出来ない。そしてそのまま、僕は気を失った。

気が付いた時、僕はベッドの上にいた。もう見慣れてしまった自室の天井が視界に広がっている。

「なんで、こんなところに？」

部屋に帰ってきて寝た記憶がない。それに、身体中に感じるこのひどい怠惰感。いったいどうしたというのだろうか。

喉に渴きを覚え、備え付けの水をコップにそそぐ。それを一気に飲み干すと、頭がいくばくか冴えたが、肝心な寝る前の記憶がはつきりしない。

一先ず、寝よう。異常に感じるこの怠さは、もしかしたら風邪でもひいたのかもしれない。

そう思い、再び目を閉じた僕の脳裏に、気を失う直前の光景が一気にフラッシュバックした。

アギトに切りかかり、かわされ、そして目が合った瞬間に見えた光景。

体中の毛が逆立つような感覚。

がばっ、と起き上がり、自分の首に手をあてる。

「ちゃんと…繋がってる」

それはそうだ。アギトは剣をすんどめたのだから。僕の首から上が吹き飛ぶ光景など、ただの想像なのだ。

そうわかっているのに、勝手に震え出す身体を、僕は両手で抱きしめた。

生きた心地がしないというのは、こういうのを言うのだろうか。

目を閉じれば浮かぶ、余りにリアルな映像。もしかしたら、本当は自分はすでに死んでいて、どこかに僕の首無し死体が落ちているのではないか。と考えてしまう。

恐怖。

そう、確かにあの瞬間、僕は死への恐怖を感じたのだ。
初めて経験する、自分の命を脅かす体験。

実際は、アギトは殺気など放っていないし、殺す気だって微塵も無かったのだろう。

しかし、アギトの相手を殺す為の動き。その余りに洗練され、流れるように、まるで僕の首に吸い込まれるような自然な動作が、僕に死ぬしかないという光景を想像させ、恐怖させたのだ。

最低でも、あと半年近く。僕は魔人部隊に所属するということを、早くも諦めかけていた。

第四話・違う世界（後書き）

おちゃらけな性格をしています、アギトは本当に強いんです。

第五話：紅ノ月六日目（前書き）

展開速いです。

第五話：紅ノ月六日目

翌日から、朝早くに部屋に来たアギトによって、僕は魔人部隊の訓練へと強制参加させられた。

朝はランニングに筋トレ、そしてアギトによる剣術指南。もちろん僕が他の隊員について行けるはずもなく、しかし甘えさせないの言葉通り、倒れるまでやらされた。

午後は昨日見たように、休憩をはさんだ模擬戦闘を通してやるという、なんとも超スパルタな訓練だ。

僕は他の隊員が模擬戦闘を繰り返しているのを横目に、アギトとの打ち込み。初日とは違っていきなり気絶なんてことにはならなかったし、アギトの振るう木剣もゆっくりとしたものに変わっていた。でも、僕の脳裏に焼きついた光景は、どうしようもないほどの恐怖心を僕に植え付けていた。木剣の先端がこちらを向くだけで心臓は高鳴り、汗が滲み出すという、もはや先端恐怖症と言っても過言ではないくらいの反応をするようになってしまったのだ。

恐る恐る木剣を振るい、少しでもアギトが反撃の兆しを見せると、大げさに逃げてしまうという僕の姿は、他の隊員の冷笑を誘ったが、満足げにうなずくアギトを見て、それらの冷笑は無視することに決めた。

アギトはいたずらでこんなことをするような奴じゃないって僕は信じてるし、フレイアさんだって、アギトなら必ず僕を強くしてくれると言ったのだから。

それでも、そんな姿をさらしてしまう自分が情け無いと思うのはどうしようもなく、僕は涙を浮かべながら必死に木剣を振り続けた。一日が終われば、軋む体を引きずって自室に戻り、気を失うように眠りにつく。そして朝になれば、筋肉痛で動けないのも無視して訓練へと強制参加させられる。

そんな日々が始まった。

十日ほど経った頃、初めてアギトの反撃に木剣で対応できた日から、魔法の訓練も追加された。僕はそっちのほうが才能があるらしく、魔法の腕はどんどん上達した。

三十日ほど経った頃だと思う。僕は自分の体の変化に気がついた。いつのまにか腹筋がくつきり割れるほどの筋肉がついていたのだ。いくらスパルタな訓練を毎日続けてるとはいえ、これはおかしいとフレイアさんに聞いたところ、僕の身体が魔族として安定した直後は、力をつけるのに最も適した時期らしいとのこと。歴代の魔王になった者も、そのほとんどがこの時期に力を開花させたらしい。

と言っても、元から持つ力がここまで貧弱だった例は僕が初めてらしいし、どの程度強くなれるのかは甚だ疑問だ。^{はなは}確かに基礎体力はすごく成長した。それは訓練をちゃんと消化できるようになったことから明らかなが、いまだにアギトに剣をかすらせることも出来ないし、先日から参加させられるようになった模擬戦闘でも、だれと組んでも一方的にやられている。正直あまり強くなっている実感がわからないのだ。

そして、蒼ノ月が終わり、僕がこの世界に来てから一月^{ひといつき}が経った。

鏡の前に立って、自分の姿を観察する。額に刻まれた瞳の紋章に、

白い髪、紅い双眼、そこから視線を下げれば、筋肉質になった身体と、訓練によって出来た傷の数々が見える。

ずいぶん変わってしまったものだ。もとの世界にいた僕の面影は、ほとんど無くなってしまった。

「この姿も、ずいぶん見慣れたな」

そう言っただけ前髪を触る。

コンコン、とドアがノックされた。ブルドがすぐに対応にでる。

「魔王様、アギト將軍がお待ちになっておられます」

わかった。そう言っただけ僕は部屋を出た。

いつも通り、アギトと共に食堂へと向かう。食堂に着くと、今ではすっかり仲良くなった魔人部隊の隊員の人達がちらほらと席についている。おはようと挨拶を交わして、僕たちもいつもの席についた。最近知ったのだが、どうやらこの食堂を使っているのは人魔族だけらしい。城の中でたまに見かける、獣魔族や竜魔族の人達はどちらかというのかとミーナに聞いてみたら、種族によって食生活が全く違うため、外に食べにいつてるらしい。魔王城は魔王のためだけに造られていてるので、昔から人魔族が優遇されているようだ。

「おはようございます、ヤマト様、アギトさん」

ミーナがトレイにお茶を乗せて持ってきた。部隊に入ってから、彼女が僕の食事を準備してくれるのは変わらない。きっと彼女は僕の毒見役なんだろうと思う。いつも僕より先に味見といって料理を一口食べるのだが、最近は僕があまりに守られてるといふのを感じ始めていることもあり、そう考えるようになった。

そう、僕は守られている。今まで一度たりとも魔王城の中を一人で散策などしたことはないし、どこへ行くにしても、必ずブルドかアギト、またはフレイアさんが着いてきてくれていた。

僕が一人になれるのは、自室だけ。きっと、あそこも誰かが見張っているのだろう。

僕が魔王候補だからだろう。ここに来たばかりのころ、フレイアさんが言っていた言葉を思い出す。「魔方阵に召還された者が、魔王になることを放棄した場合、魔界は必ず戦乱になる」確かにそう言っていた。おかしい話だが、魔王がいないと魔界は荒れるらしい。それだけ重要な存在なのだろう。

誰もが、魔王になるかもしれない存在として僕を扱う。その通りなのだからしかたがない。ただ、最近そのことにストレスを感じるようになってきたのだ。

正直な話、僕は魔王になろうなんて思っていない。魔王になる義理がないのだから。でも、そう思っているのに期待されると、後ろ暗く思ってしまうのだ。

期限まで、半分が過ぎた。

そろそろ、真剣に考え始める時期が来たのかもしれない。

第六話：城下へ行こう！

「そつえば、そろそろ収穫祭の時期ですね」

食事も終わり、訓練の始まる時間までまったりしようとお茶を飲んでいると、唐突にミーナが言った。

「ヤマト様は城下へは行かないんですか？」

亜麻色の瞳を真っ直ぐ僕に向けて聞く。純粹に興味心から来た質問だったのだろう、ミーナはポロリと爆弾発言をした。

「え、城下って何？」

その発言に驚いたのは、ミーナだけではなく、アギトまで驚いていた。お茶が気管にでも入ったのか、しきりに胸を叩いている。

「ゴホッ！ お前、まさかこの城から一步も出たことねーのか？」

無言で頷くと、二人はさらに驚愕する。しょうがないじゃないか。ここに来てからは、勉強や訓練でそんなことを考える余裕がなかったんだから。

でも確かに、魔王城とはいえ、王城があるのだから城下町があっても変じゃない、むしろ当然だ。僕はつきり、ゲームで出てくるような、誰も来ないような場所にひっそりと佇んでいるのかと思っていた。

「これはいけません！ 今日あたと一緒に城下へと行きましょう！」

ミーナが決心したとばかりにガッツポーズをとる。しかし、この言葉に慌てたのは僕とアギトだ。

「ちょっと！　僕はこの後訓練があるんだよ？」

「そうだ！　こいつだけ休ませるなんて出来ん！」

一応魔人部隊の一員としての自覚が出来てきた僕と、部隊をまとめる立場に居るアギトは、そんなことが出来るわけがないと反対する。確かに城下町はものすごく気になる。でも、他の皆が厳しい訓練をしているというのに、自分だけ遊びにいくなんて、そんなことは出来ない。

「なに言ってるんですか！　魔王候補ともあるう者が、城の中で引きこもって城下の存在も知らないなんてありえません！」

「でも僕は」

「それに！」

魔王になると決めたわけじゃない。そう続けようとしたが、ミーナに阻まれてしまった。

「魔界の住人を知らない者が、どうして魔王になろうなどと思えますか」

僕の目を見つめてミーナが言う。その悲しそうな瞳は、僕にもっと魔界について知ってもらいたいと、切に願っているようだ。僕は自分の心が読まれてるのではないかと、ドキッとした。

確かにミーナの言うとおりだ。僕は魔界のことはブルドから聞いたことしか知らないし、魔王城に住む人とはしか会ったこともない。そして、僕が魔界についてなんとも思っていないのも確かなのだ。

僕は何も言い返せなくなってしまった。

「うーん、しかし訓練が…」

まだ悩むアギトに、ミーナは厳しい表情をして畳み掛ける。

「あなた方の本来の役割は、ヤマト様の護衛のはずです。もしや、天下の魔王軍魔人部隊ともあろうものが、城下ではヤマト様を守る自信がないということですか」

やはり、魔人部隊も魔王候補を守るためにここに駐留していたらしい。

今の言葉は、アギトの、いや、魔人部隊の琴線に触れたらしく、食堂の空気がガラリと変わるのを感じた。

「ほっほう。そこまで言われちゃ、後には引けねえなあ」

ゆらり、と立ち上がるアギト。その目は闘志に燃えていた。食堂を見渡して指示を飛ばす。

「魔人部隊、本日の訓練は城下での魔王候補の護衛に変更！ 全員に通達しろ！ 各自作戦室に集合、集まりしだい作戦を練る。出発は月が中天にかかる頃だ！」

食堂に居た隊員たちが、返事をして俊敏に解散する。どうやら彼らもミーナの言葉に感化されたらしい、やる気が伝わってくる。

「これでいいんだろ」

そう言ってミーナを見下ろすアギト。ミーナは満面の笑みで頷いた。

第六話・城下へ行くこつ！（後書き）

しばらく続きます。

城下へ行くこう！（２）

見上げれば、満天の星空の中央に浮かぶ、地球とは比べ物にならないほどの、巨大な紅い月が視界に入る。肌を感じる冷たい風、鼻につく木々の香り、そしてこの開放感！

僕たちは今、魔王城に最も近い町に向かっている。移動は徒歩、護衛となる隊員は少数に抑えたらしく、僕とミーナ、そしてアギトたち魔人部隊の一行は、総勢六名でゆつくりと城下町「レーヴァンテイン」に向かっているのだ。

僕は久しく忘れていた外の空気に触れて、かなり上機嫌になっていた。

「ねえミーナ、レーヴァンテインってどんなところなの？」

隣を歩くミーナに問いかける。

「さつきから、そればかりですね」

ふふふ、とミーナが微笑みながら説明してくれる。

レーヴァンテインという名は、大魔王ウルディウスが魔界統一を果たしたときに用いた魔剣の名から取られているらしく、それに恥じない大きな町らしい。

魔界を構成する三つの領土の中央に位置し、まさに魔界の中央と呼べる上に、魔王城に最も近いという、聞く限り、これぞ天下のお膝元といった感じだ。

「ブルド様に教わらなかったんですか？」

「ブルドの話だと、魔王城を建設したあたりだよ」

たまらず苦笑いして僕は答えた。そういえばブルドから魔界の詳しい地理は習ってない。魔人部隊に入隊してからは勉強する暇もなかったけど、どうやらまたブルドに教えを請う必要があるようだ。

「ははっ、ブルドのやつらしいな。あいつは昔っから一から全部教えようとするから、肝心なことを聞き出すまでにかなり時間がかかるんだ」

アギトが笑いながら、魔王城に来て初めてブルドと会話した時の話を始める。

紅く照らされた道に、僕たちの笑い声が辺りに響き渡った。

町までの道は木々に覆われていて、そのどれもが初めて見るような奇妙な形をしている。

振り向けば魔王城がだんだんと木々に隠れていくようすが見え、前方には恐らく町のもであろう光が空を照らすのが見えてくる。僕は未知の物への興味のせいで興奮が収まらなかった。

レーヴァンティンに着いたときの驚きようといったら、言葉にできなかった。

太陽の光が届かない魔界は、月によって変わる四種の月明かりに照らされる。現在は紅の月明かりによって照らされているはずなのだが、そんなことを感じさせないくらいにレーヴァンティンは明るかった。外なのに、まるで室内のようだ。

そして、溢れんばかりの人、人、人！ 魔王城から出たことのなかった僕にとって、これほどの人数の魔族を見るのは初めてだ。基本的には人魔族が多く暮らしているようだが、獣魔族や竜魔族、さらには初めて見る水魔族までもがそこらへんを歩いている。人魔族ばかりの魔王城ではありえない光景だ。

「……」

開いた口が塞がらないとはこのことだ。

町を照らす街灯に、活気溢れる商店街、そしてそこで商売をしているのは、多種多様な魔族たちなのだ。魔王城のすぐ近くにこんな場所があるなんて、今まで考えもしなかった。

「行きましょう、ヤマト様！」

啞然とする僕の腕を取り、ミーナは商店街へと引つ張っていく。僕は紋章を隠すようにと渡されたフードを、慌てて被った。

「いらつしゃい！ おやミーナちゃん、今日はデートで来たのかい？」

見たこともない奇妙な果物売る獣魔族の店主が、陽気な声で話しかけてきた。毛むくじらの体に真っ赤な顔、なんとも人当たりのよさそうな顔をしているその店主は、まるでゴリラほどの大きさの猿みたいな姿をしていた。

僕は、はぐれないようにと繋いでる手をみて恥ずかしくなった。アギトたちは、少し離れてついてきてるし、二人で手を繋いで買い物なんて、デートをしてるようにしか思えない。

慌てて離そうにも、ミーナが強く握っているから離せない。

「そうなんです。それで今日は、彼がこの町に初めて来たって言うから案内しているんですよ」

ついでに食材も買っていつちやおうかな。と世間話を始めるミーナだが、僕はそんな場合じゃない。ミーナが「そうなんです」なんて答えるもんだから、どんどん顔が熱くなっていく。

これはデートなのだろうか。でも二人つきりなわけではないし、アギトたちがすぐそこで見張ってる。

「…げっ」

僕は重大なことに気づいてしまった。アギトたちが見張ってるということは、僕がデートと言われて赤面しているところも見られてるということだ。

僕は慌ててフードを目深にかぶり直すけれどももう遅い、あとでアギトにからかわれることは確実だろう。案の定、わざわざ僕の視界に入るようにアギトがにやけ面で移動してきた。

いつか燃やすっ。そんなことを考えているうちに、ミーナは何かを買ったようだった。まいどありー、と言う店主の声を後に、また違う店へと足を運ぶ。

「なに買ったの？」

ミーナが買ったのは、なにやら紫色の物体。形は桃のようだが、見るからに毒っぽい。

「これはエルツの実と言って、とても甘くておいしいんですよ。歩きながら食べようと思って」

はい、とエルツの実を渡される。見た目に気後れしてしまうが、おいしそうにほおばるミーナを見て、意を決して齧り付く。

「どうですか？」

「う、うまい…っ！」

見た目とは大きく違うその味に、僕は驚愕してミーナを見た。その様子にっこりと微笑むと、ミーナは得意げに話し出した。

「エルツの木は獣魔族の領地に生えていて、月の光が持つ魔力によって育ったこの実は、毎月違った味がするんです。今は紅ノ月ですから、最もおいしい時期ですね」

食べると魔力も少し回復するんですよ。と説明してくれるミーナだったが、僕は食べるのに夢中であまり聞いていなかった。

僕が魔界に来て、一番気に入ってること。それは、食べ物がいしいことかもしれないと思った。

城下へいこう！（3）

「ねえ、あれは何の店？」

僕は気になる店を発見したので、ミーナに質問してみた。

「あそこは武器屋ですよ。入ってみますか？」
「うんっ」

これでもかといわんばかりに即答すると、僕はミーナを引っ張って店に入ってしまった。

店内は大量の武器で溢れかえっている。そして、そのほとんどが剣のようだった。最近剣術を覚えたものとしては、これほど興味をそそられる物は無いだろう。何を見ようかと店内を見回していると、入り口からアギトが入って来た。他の隊員は入り口前で待機してる。

「ようお二人さん、今日はデートかい？」

ニヤニヤとむかつく顔して、白々しく言う。自分だつてフレイアさんの前では、びっくりするくらい顔を赤くするくせに。

「…覚えてろよ」

僕は復讐を心に誓った。

「…それにしても、なんでアギト達はもつと近寄ってこないのさ。僕の護衛で来てるんでしょ？」

「そんなもん、少し離れてたほうが護衛しやすいからに決まってんだろ。お前にはミーナが付いてるんだし、俺たちが近くに居たって

やりづらいだけだ」

近くある適当な剣を見ながら、アギトは当たり前のことのように答えた。

そんなもんなのか、と僕は納得することにした。そんなことよりも今は剣を見なくては。

「ヤマト様は、武器に興味がおりなんですか？」

訓練に使っている木剣を、そのまま金属に変えただけのようなシンブルな剣を見ていると、ミーナが横から覗いてきた。

「うん。ほら、アギトとか他の隊員の人達は、皆自分の剣を持っているでしょ？ だから、僕も自分専用の剣がほしいなーってね」

腰にある、なんのへんてつもない剣を叩きながら言う。これはブルドが持ってきた、由緒ある『訓練生専用』の剣らしい。なんでも、何代か前の魔王にすごい剣豪の人が居たらしく、その人が弟子に渡した物らしい。

ぶっちゃけ、有難くもなんともない。だって刃こぼれしてるし。

「うーん。確かにヤマト様の剣よりも、あたしの包丁の方が強そうですね」

確かに。ミーナは腰の後ろの方に、包丁をいくつか取り付けているのだが、なんだか二刀流みたいでかつこいい上によく切れそうだ。

「…二刀流もいいかも」

そんなことをぼやいていたら、アギトに後ろ頭を叩かれた。

「やめとけ、お前には無理だ。それより、剣が欲しいんだったらこれがいいんじゃないか？」

そう言つてアギトが持つてきたのは、なにやら呪われてそうな、髑髏はようこの装飾がされた剣。あまりの禍々しさに、触るのも憚はばれるそれは、柄の部分が骨製の。

これはふざけてるのだろうか。まあ、顔を見る限り、これはふざけてるね。

「もしアギトの剣と交換してくれるなら、それでもいいよ」

アギトは露骨に顔をしかめた。アギトの剣は、魔界でも珍しい魔剣らしい。雷帝剣フィビト、それが魔剣の名前であり、アギトの相棒だ。

しぶしぶと不気味な剣を元の場所に戻すアギト。

僕は結局、はじめに持っていた剣を買った。手に馴染むし、なによりも安かった。弘法筆を選ばずとかつこよく言えたらいいけど、実際は僕の剣の腕だったら、この程度が妥当だろうといったところだ。人魔族の店主にお金を渡して店をでる。

初めて使う初任給のお金。そして魔界での初めての買い物。僕は今、魔界を満喫しております。

その後も、様々なものを見て回った。魔力で水を操る幻想的な噴水や、様々な小型の魔獣を売ってるペットショップ、中でも占い師がいたのには驚いた。もちろん占つてもらった。恋愛で僕とミーナの相性を占ったら、まあまあと言われた。……まあまあねえ。

全てが新鮮だった。たくさんの人が話しかけてきて、いろんな魔族を知った。僕の胸は、ずっと高鳴りっぱなしだった。

これが、魔界に住む住人の生活。もっと知りたい、もっともっと発見していきたい。

「こんな楽しそうなヤマト様、初めて見ました」

不意にミーナが言った。うれしそうに笑う彼女。今の僕には、彼女のしぐさの一つ一つも新鮮に見える。いや、そもそも、こんなにはつきりと見るのは初めてかもしれない。

なんて表現したらいいかわからないけど、そう、まるで目の前に下ろされていたフィルターが剥がされたかのように、世界が色鮮やかに見えるのだ。

「うん、僕もこんなに楽しいのは初めてだよ」

繋ぐ手に少し力を籠めて、僕は笑った。この世界に来て、初めて心の底から笑ったきがする。なんともすがすがしい気分だ。

見上げれば、視界に入る紅い月。さっきよりも色鮮やかに輝くその月を、僕は少しだけ好きになった。

第七話：最強を冠する者達

踏み込みと共に剣を振るう。体重を乗せたその斬撃はしかし、相手を傷つけることは無く空を切った。最小限の距離を後ろに下がっただけで、僕の攻撃を避けるアギト。

もう一步、あと少し。振り下ろした剣を、そのまま突きへと繋げる。逆の脚で、さらに踏み込もうとした瞬間、アギトの姿がブレた。右側にぞわりとした感覚。側頭部に集中したその感覚を信じ、上半身ごと前へ転がる。

ブオンッ！

髪の毛が掠ったのがわかった。前転して、片膝をついたままではあるが、アギトが居るのであるう場所へ構える。

右手に持つ木剣は肩に乗せ、左手をこちらに向けるアギト。掌から、五つの火の玉が発生した。

そして僕を見据え、アギトはニヤリと不敵に笑った。これでおしまい、その意志表示。

回避は不可能。

ならば、迎え撃つっ！

イメージする。足元から立ち上る^{のぼ}るように、体全てを覆うように、魔力が渦巻くように。

大切なのは、想像力。より鮮やか、より速やか、より詳細に。

水、流れる、冷たい、静かなる水面、水溜まりなんかじゃない、底無しの泉。

体から放出される魔力が、しだいに質量を持つていく。想像を実現し、世界に働き掛ける力。それが、魔法。

僕は一瞬にして、水の膜に包まれた。向こう側を、たやすく見ることが出来るほどの薄さ。でも僕にはわかる。この波一つ立たない水壁が、どれほどの力を持っているのかを。

目視するのが難しいほどの速さで放たれた五発の炎の弾丸は、しかし突如発生した水の壁に衝突して消えた。

それを見たアギトの顔が、歪んだ笑顔に塗り潰される。楽しい、楽しい、楽し過ぎて壊してしまいたい。そんな声が聞こえそうな程の、異常な顔。

最近見るようになった、魔族であるアギトの素顔。戦うのが好きで好きでたまらないといった表情。

この顔を見せたアギトがその次に繰り出す攻撃は、『絶対不可避』そう思わせるほどのものが来る。

僕の体に緊張が走った。異常に増す圧迫感、これが、魔人部隊隊長アギトの力の片鱗。

感覚を研ぎ澄ませ、あらゆる攻撃にも対応出来るように身構える。意識していない、本能の部分にまで働きかけるように、心を静まらせた。

僕がこの魔人部隊で、最初に教え込まれたこと、それを最大限に発揮させるのだ。

どこだ、どこから来る。

不意に足が震える。怖い、すごく怖い。無意識に感じるいかなる些細な兆候も全て把握し、そこから次の攻撃を予測する。それこそが、

今の僕が持つ最大の武器だ。そして、今僕が予測したのは、前方全てを覆い尽くすほどの、圧倒的な力の爆発だった。

アギトの木剣が帯電し、地面を擦るような起動で振り上げられる。空間を引き裂くような轟音、地面が爆ぜる爆音、視界を埋め尽くすほど凶悪な衝撃波。

やられるっ！

今度こそ僕は直撃を喰らった。

吹き飛び、宙に浮かぶ体。このまま地面に叩きつけられるのだろう。意識が薄れる中、僕はそんなことを考えていた。

「やりすぎではないのか」

聞きなれない声がしたと思ったら、僕は地面とは違う感触のものにぶつかった。分厚いが、硬すぎないゴムのような感触、その慣れない肌触りに、落ちそうになっていた意識が浮上した。

見上げれば、人魔族とは違う爬虫類のような顔、そして肌を覆う柔らかない鱗。 竜魔族、そう認識するのに時間はかからなかった。

「魔王候補を守るのが魔人部隊の仕事だと、私は思っていたのだがな？」

辺りに響く、この低い声。どこかで聞いたことがある気がする……。しかし、それ以上考える前に、僕の意識は闇に包まれた。

最強を冠する者達(2) (前書き)

説明が足りないとのこと指摘を頂いたので、その内ブルドの勉強会を開きたいと思います。

聞きたいことなどがあれば、感想などで質問を募集しますので、そちらにお願いします。

最強を冠する者達（2）

気が付いた時、僕は訓練場の片隅で寝かされていた。

ああ、またか。

最近は度々こんなことがある。あれだけの攻撃をアギトが出すというのは成長している証なのだろうけど、気絶するのはあまり慣れたくはないものだ。

それにしても、気を失う直前に見た人物は誰なのだろうか。どうやらアギトの知り合いのようだったけど…。

「体調はいかがですか？」

僕が目覚めたことに気付いたブルドが、飲み物を持って来た。

ありがとうと言って一気に飲み干し、あの竜魔族の男について聞いてみる。

「ああ、ガラルド様の事です力」

「ガラルド？」

向こう側を見れば、そのガラルドという男が、訓練している魔人部隊をアギトと共に指導している。

一体何者なのだろうか。

「ガラルド様は竜王様の片腕とも呼ばれる方で、黒竜部隊が編成されたら真っ先に隊長候補となるお方でス」

黒竜部隊ということは、もし僕が魔王になったら部下になるかもしれないってことか。

今の魔王城には基本、人魔族しか居ない。それは、魔王が崩御されたときに魔人部隊以外全ての部隊が解散するからだ。竜魔族、獣魔族、そして水魔族は、魔王が現れた時に初めて魔王の下に集い、それ以外の時は各種族の王によって統制されている。つまり魔王が居ない時、魔界はその王達によって動いているのだ。王自体が魔王以外有り得ない人魔族は特別な分類になるが、まあ今は関係無いだろう。

とにかく、事実上現在の魔界の頂点に君臨する一角の片腕とも言われる人が、どうして魔王の居ないこの魔王城に居るのだろうか。

「そんな人がどうしてこんな所に居るの？ まさか、まだ魔王になるって宣言した訳でもないのに挨拶しに来たとか？」

確かにそれだけの地位に居るということは、魔王候補が召還されたことを知っていてもおかしくはない。魔王候補が魔王になることを放棄した場合を考えて、正式に宣言するまでは召還されたという事実は極秘になるのだが、各王には当然その知らせは届くだろうし、その片腕たる彼がその事実を知っていることは容易に想像出来る。

「それもあるでしょうが、今回の訪問はアギト様のご招待になります。たまにガラルド様を魔人部隊の特別講師に招くことがあるのです。なんでも、お二人は旧知の仲だと力」

なるほど、そういうことか。まあ挨拶なんかに来るわけがないしね。魔眼がまだ覚醒していない僕は魔王になる可能性は最も高いだろうが、他種族のガラルドさんにとってはそこらへんの貧弱な少年であることは変わらない。召還された当初に、一度だけ第三の目が開い

たことはあるが、あれ以来は開く兆候さえ現れないのだ。

「ふーん。あ、そういえばブルドにお願いがあるんだ」

「なんでしようカ？」

久しぶりにブルドの説明を聞いて思い出したのだが、僕はもう一度授業を再開してくれるように頼んだ。ブルドは心良く承諾してくれ、授業は三日に一度、午後の訓練を途中で抜けてすることになった。アギトにはもう話は通してあるから簡単に話がついた。

訓練を指導していたアギトが、こっちを見て手を振っている。どうやら僕が起きたことに気づいたようだ。

「じゃあブルド、僕はまた訓練に戻るね」

「はい、お氣をつけテ」

僕は横に立てかけてあった買ったばかりの剣を持つと、走って訓練へと向かった。

「おう、もう大丈夫なのか」

近づくアギトがそう聞いてきた。僕を吹っ飛ばした本人がよく言う。

「うん。まだ少し痛みがあるけど、訓練する分には全然問題無いよ」

肩をぐるぐる回してやる気をアピールする。

「ほらな！　ちゃっかり後ろに飛んで衝撃を逃がしてたし、風を起こして防御までしてたんだぜ？　やっぱ教え方がいいんだな、うん」

ガラルドへと自慢げに語るアギト。まあ、そこまでののに気絶するほどぶっ飛んだんですね、僕。

「ふむ、真剣ではなかったからというのもあるだろうが、あの攻撃を喰らってそれだけの気力があるというのはなかなかやる」

ガラルドさんが横に投げ捨てられた、半分以上が粉微塵になった木剣を見て言う。

それにしてもこの声、やはり聞き覚えがある。

「あの、会ったことありましたっけ？」

勇気を持って聞いてみる。考えていても仕方が無いし、失礼かもしれないが、こういうのは本人に聞くのが一番だ。

少し驚いたような顔（思ったより表情が豊かなようだ）をしたガラルドさんは、改めて僕と向かい合った。

「確かに一度だけ、それもほんの少しの時間だけ会ったことがある」

やはりそうか。ということはあの時の…。

「僕がこの世界に来た時ですね」

「その通りだ。どうやらこの魔王候補の少年は、えらく記憶力がいい

「いようだな」

僕は内心ふんぞり返った。小さい頃から物覚えだけには自信がある。僕の持つ最大の武器、その二つ目がこの記憶力なのだ。

「改めて自己紹介します。僕の名はヤマト、一応魔王候補です」

「私の名はガラルド。ガラルドと呼んでくれ」

最強を冠する者達(3)(前書き)

今まであまり触れませんでした。魔界の男は、基本上半身裸です。
(もちろんヤマトも裸です)

最強を冠する者達（3）

僕は今、激怒している。何故か、それはガラルドさんの発言についてだ。

「まったく、あそこで言い返さないなんて、アギトらしくないよっ」

「どうしたのですか？　ずいぶんご立腹のようですが」

今はブルドの授業中。善は急げということで、言った初日から再開したというわけだ。

「だって、魔人部隊が最弱の部類に入るだなんて言われたんだよ？　悔しいじゃん」

僕の愚痴に、ブルドもどう対応していいかわからないようだ。僕がこれだけ怒っている理由、ガラルドさんの、いやここはあえてガラルドと呼ぼう、ガラルドの発言、それは僕とガラルドが自己紹介して、しばらく経った時に発せられた。

アギトの話によると、昔アギトが武者修行をしていた時に、竜魔領のとある田舎でたまたま山賊退治をしたらしいのだが、そこで山賊を討伐しに来たガラルドと偶然出合ったのだそう。

でも戦闘で殺気立っていたアギトはそのままガラルドにも攻撃を仕掛け、ガラルドからしてもアギトは血に餓えた危険人物にしか見えず、二人は出会い頭にいきなり死闘を繰り広げたのだ。結果は引き分け。そして、二人はそれから友人となった。

ここまではいいのだ、僕が怒っているのはこの後のガラルドの発言。

まあ要約すると、人魔のくせにアギトは異様に強い。でもそれってアギトだけであって、他の人魔って皆弱いよね。このような発言を、よりにもよって人魔の精鋭である魔人部隊を横目に言ったのだ！

僕は立ち上る腹立たしさに机を力いっぱい叩いた。

「こんちくしょうっ！」

「おやめ下さい、魔王様」

びっくりしたように、ブルドに止められた。うん、確かにこんちくしょうはなかったよね。

「この野郎っ！」

そういう問題じゃないというのはわかってはいるけど、どうしてもむかつくのだ。皆が日々どれだけ精進しているかを、僕は直接見ているのだ。あんなこと言われて、腸が煮え返るとはこの事だ。だいたいアギトもアギトだ、曖昧な笑いを返すだけで言い返さないなんて

どうやらブルドも諦めたらしく、仕方なさそうに授業を開始した。

「わかりました。ではちょうどいいですし、今日はそこらへんの事情についてお話ししましょう」

その言葉に、とりあえず僕も矛を収め、話を聞くことにした。

昔、魔界は竜魔族、獣魔族、水魔族、そして知恵を持たぬ魔界の生き物、魔獣の四つに分類されていた。人魔族などは存在していなかったのだ。人魔族は当時、獣魔族として生活をしていた。

では、何故人魔族として、獣魔族とは別になったのか。そもそも、何故人魔族として最初からなかったのか。それは人魔族が戦闘に向いていないためであった。

強靱な肉体と俊敏性を持つ獣魔族、生物の根源たる水に特化した水魔族、そして最強の生物竜魔族、そのいずれにも、それぞれ魔王を名乗る王が居たのだ。最強の下に集う似たような者達、それが種族という分類の始まりだった。つまり、人魔族には魔王を名乗るだけの強さを持つ者が居なかったのだ。

しかし、ある時変化が現れる。それこそが魔界の、本当の意味での初代魔王ウルディウスであった。各種族による戦乱の真つ只中に、突如現れた人魔族の少年。その圧倒的な力の前に、各種族の王は倒され、当時最強として名を馳せていた竜王ファフニールを滅ぼしたその少年は、魔界統一を宣言したのだ。

そして、人魔族が生まれた。人魔族で魔王が現れたのだから、それは必然であった。

「しかし、人魔族において強いのは、大魔王ウルディウスだけだったのです」

つまりはそういう事なのだ。たまたま魔王が現れたから良かったものの、本来人魔は獣魔族の下につく貧弱な生き物だということだ。しかし、僕はここで重要なことに気付いた。

「ん？ てことはだよ？ アギトは魔王の素質があるってこと？」

そう、ガラルドが言っていた通りとするならば、アギトは人魔としては異常に強いということだ。ならば、アギトが人魔の魔王を名乗る事も出来るのではないか。

「いいえ、王を名乗るにはさらに力が必要なので。アギト様は確かに人魔としては限界を超えた強さをお持ちです。しかし、各種族の王もまた、それぞれの種族において限界を超えた者なので」

つまり同じ限界突破でも、元のスペックが大きいほうが強いという事か。アギトでも無理だというのに、本当に僕は魔王になれるのだろうか。

「ねえブルド、僕ってそんなに強くないけど、本当に魔王になれるの？」

魔王を名乗るには、魔界で最強でなければいけない。つまり、アギトよりもさらに強いという化け物のような王達よりも、さらに強くなくてはならないという事だ。

「大丈夫です。前にも言いましたが、魔眼が覚醒した時、魔王様は魔界を統べるにふさわしいお力に目覚めるのです」

うーん。確かに以前、授業でそんなことを言っていたけど、全く実感が湧かない。本当にそれだけで強くなれるのだろうか。

魔王になるには、最強でなくてはならない。それは、とても重要な事実だった。

第八話：始まりの収穫祭

あと数日もすれば、収穫祭が始まる。それは、紅ノ月も半分が過ぎるということだ。

刻一刻と迫る決断の時、僕はまだどうするか決心がつかない。

『魔王』それは僕の想像とは全く違う存在だった。魔界の混乱を治め、人魔族の希望であり、魔界において最強たる者。

考えれば考えるほど、僕には似つかわしくない。僕はまだ子供で、そんな責任を負うことなんてとてもできない、そう思う。

ねえ、誰か教えてよ。どうして僕なんかが選ばれたのかな。

「おい、聞いてんのか？」

考え事をしていた僕は、アギトの声で今の状況を思い出した。

「ええつと、なんだっけ？」

僕とアギトは今、魔王城の中庭を横切るように造られた回廊を歩いていた。見下ろせば綺麗に切りそろえられた芝生のような植物が見え、紅い光に照らされて幻想的な光景を造り出している。

「だから、俺がさりげなく収穫祭の話をするから、ヤマトがこれまたさりげなく一緒に行きませんかみたいな事を言うんだって」

ああそうだった、へなちょこでへたれなアギトはフレイアさんを誘うのに、一人じゃ勇気がないからって僕を無理やり連れて来たんだった。

「わかったよ。さりげなく誘えばいいんだね」

わかればいいんだ、とか言っただけそうに頷いてるアギト。馬鹿だね、わざわざ僕に復讐のチャンスをくれるなんて。僕の邪悪な表情には全く気づかず、浮かれた様子のアギト。

どんな復讐をしようかと考えているうちに、フレイアさんが居るであろう書物庫に着いた。

こほん、と咳払いをして、もう一度確認をしてくるアギト。

「わかってるな」

もうすでに緊張しているらしく、赤ら顔になってきたアギト。僕は笑うのを堪えながら頷いた。

よし、と気合を入れてから、アギトは目の前の重厚な扉を開いた。

「あら、今日はどうしたの？」

フレイアさんは、部屋の中央、いつもの場所に座っていた。僕もたまに来るのだが、フレイアさんはいつもこの部屋でなにかを調べているのだ。そしていつも思うのが、その美しく輝く炎のような髪の毛は、薄暗い空間で読書をするのにとっても便利だったことだ。

緊張の限界を超えたらしく、口をぱくぱくさせているアギト。かわいそうに、行動力はあるのに意味がない。

僕は別に緊張するような事でもないの、さらりと用件を口にした。

「ねえ、フレイアさんは収穫祭の日は空いてるかな。アギトが一緒にどうですかって言うてるんだけど」

目玉が飛び出そうなくらい驚愕するアギト、なにやら変な汗までかいている。

そうなのですか？　と言う風にアギトに視線を送るフレイアさん。アギトは発狂寸前の不振人物のようにそわそわしだした。

手は振るえ、呼吸も荒い。もしこんな様子のアギトを町で偶然みかけたら、正直絶対近づきたくない。いや、もしかしたら「何をやらかすつもりだ！」とか言って殴りかかるかもしれない。

「おおおおおお、おう」

なんとか口元に引きつった笑いを見せて、アギトは頷いた。よくやった、と拍手を送りたいのを我慢して、僕はフレイアさんの返事を待つ。

顎に手を当てて考えるフレイアさん、果たしてその返事はいかに。この数秒間が途方もなく長く感じる。ごくろ、と隣から聞こえた。

「わかりました。それでは、私もお言葉に甘えてご一緒させて頂こうかしら」

ふわり、と柔らかく微笑むと、フレイアさんは快く了解した。ああ、まるで天使のような微笑だ。アギトが惚れるのも頷けるね。一方アギトはというと。

「げっ」

なにやら滝のような涙を流している。こゝこれは喜びの涙！ あまりに嬉しい事があると、自然に流れてしまうという幻の！ なぜだか僕まで嬉しくてテンションが上がってきた。

「あの、それじゃあ当日にアギトが直接迎えにくるので。失礼します」

そう言い残して、僕は放心状態のアギトの背中を押ながら書物庫を後にした。でも、僕はちゃっかり見ていた。フレイアさんの尻尾がゆらゆらと忙しく揺れていた事に。

これは脈ありかもよ？

そして今度は僕の番。僕たちが今居るのはもちろん食堂。

「ねえミーナ、収穫祭一緒に行かない？」

僕は自身満々でミーナに聞いた。何故なら、優しいミーナなら一緒に行ってくれると思ったからだ。

「ごめんなさい。当日はあたしたちもお店を出すから一緒に出来ません」

瞬殺。本当に申し訳なさそうに謝るミーナ。一瞬何を言われたのかわからなかった。というか、お祭りにミーナ抜きで行くなどという事自体が想像していなかったのだ。

どうにかして説得しようと思うのだけど……うつ、そんな瞳で謝られたら諦めるしかない。

「い、いや、いいんだよ。そう、お店、頑張つてね」

見事に撃沈した僕は、ふらふらとした足取りで食堂を出る。すると、まだ夢の世界から帰ってこないアギトの姿。僕は思いっきり脛を蹴飛ばしてやった。

「いてっ！ なにすんだよ」

そんなこと言いながらニヤニヤしてる。ああ、むかつく。

魔界来て初めての収穫祭を、護衛の魔人部隊と一緒に行けというのだろうか。

いや、確かに魔人部隊はミーナと一緒にいても着いてくるが、花がないのは大きな差だ、主に僕の気分が。

というか、ミーナと一緒に行きたいだけなんだけどね。

がつくしと肩を落とす僕に、アギトが明らかにからかいの声色で話し掛けてくる。

「なんだ、断られたのか？ ああ、そういえば収穫祭には魔王城からも店だすんだったな。まあいいじゃねえか、俺が着いてってやるんだから」

フレイアと回った後でな、といちいちむかつく言い方をするアギト。僕が収穫祭に行くのは午後だ。それまでは約半分の魔人部隊の護衛と共に、魔王城で待機しなくてはいけない。そしてその間はブルドの授業がある。

実はかなり楽しみにしてた収穫祭が、一気につまらなそうに思えた。

まあ、アギトと回るのも楽しいのだろうけど。それとこれとじゃ話し別だ。

「そんなぶすくれんなよ。今日はもう遅い、部屋まで送るからまた明日な」

アギトに促され、しかたなく僕は部屋へと戻った。おやすみ、そう言って部屋の前で別れた。

憂鬱な気分で布団に潜ったら、いつの間にか寝ていた。

夢を見た。

『君は誰？』

知らない少年が、僕に問い掛けている。

僕はヤマトだよ。

真っ暗な場所、少年と二人きりの空間に、僕の声が響いた。

『そうじゃない。どうして君はこの世界に居るの？』

なおも少年は質問を続ける。

僕は魔王になるように召還されたんだよ。

その答えを、少年は予想していたようだった。静かに目を閉じて、何かを考えている。

やがて、閉じられていた双眼は開かれ、僕を見据えた。

『……世界が、動くよ』

僕にはその言葉の意味がわからなかった。

『君は、選ばれたのかもしれない』

なにに。その言葉は、驚愕によって塗り潰された。暗くて気付かなかったが、その少年は鎖で拘束されていたのだ。両足、両膝、両手、両肘、全てが鎖で繋がれている。

『逃げられないよ。歯車はもう、止まらない』

少年は、まるで忠告のように言う。

なんだろう、胸騒ぎがする。

質問しようにも、なぜか声が出ない。

近付こうにも、僕には体がない。

そう、ここに僕の身体は存在しない。

ああ、少年が闇に吞まれていく。

『引き返せないよ』

そう残して少年は消えた。

始まりの収穫祭（２）

夢で聞いた言葉が、頭から離れない。あの夢は、いったい何だったのだろう。そして、あの少年は誰なのだろう。妙に現実味があつて、胸に残るこの不安はなんだろうか。

世界が動く。僕の耳に、歯車の軋む音が聞こえた気がした。

今日は収穫祭の当日だ。アギトは今頃、フレイアさんと楽しんでゐるのだろうか。

それに比べて、僕はなんと虚しいことか。

「この収穫祭は別名『レナ・メルレルト』と言いまして、これは古代語で月の恵という意味です」

今日の勉強は収穫祭づくしだ。すぐ近くでその収穫祭が行われているというのに、どうして勉強しなくちゃいけないのか。

ああ、耳を澄ませば収穫祭の喧騒が聞こえてきそうだ。

ミーナは今頃どうしているのだろう。魔界の収穫祭はどんな様子なのか。今すぐに行きたい、でも 그레이が見張ってるから逃げられない。副隊長の 그레이は、その素早さが武器だ。一度訓練でぶつかつた時、そのあまりの速さに一度も剣を当てることが出来なかつた。實力は、文句なしで魔人部隊の二番手だ。とにかく凄い奴なのだが、何故だ

かやたらと僕を睨み付けてくる。

つまり何が言いたいのかというと、これじゃあ嫌われてるだろうから駄々こねても無駄な上に、相手のほうが素早いので脱走できないということだ。

もう少し、あともうすぐで、アギトが迎えに来てくれるはず。そう思っている時に限って、どうして時間が経つのを遅く感じるのだろう。

もう我慢の限界だ！ まさに僕の貧乏ゆすりが最高潮に達しようとしたときに、やっとアギトは来た。

「よーヤマト！ 行こうぜ！」

勢い良く部屋の扉が開かれ、満面の笑みのアギトが顔を出す。この時ほど気合の入ったガッツポーズをしたのは始めてだった。ブルドに別れを言って、走るように部屋から出る。途中やっぱグレイのきつい視線を感じたけど、今はそんなの無視だ。

「なんだなんだ、そんなに俺に会いたかったのか」

「ばーか。それよりフレイアさんとのデートはうまくいったみたいだね」

デートの意味がわからないようなので、逢引のことだよと説明した途端アギトの顔が赤くなる。

「そ、そんなんじゃないよ！」

照れくさそうに否定するアギト。僕もミーナと一緒に収穫祭を回ったかったのに、今回はアギトと一緒に。

はあ、とため息が漏れた。

紅い月の下、月光に負けぬように光を放つレーヴァンティン。先日来た時とは違い、魔族の数が半端なく多い。

飛び交う喧騒、漂う食べ物の匂い、どこからとなく聞こえてくる聞き慣れない音楽、そしてこの祭り特有の高揚感。これが収穫祭、レナ・メルレルト。

「うわー、すごい人の数だね！」

周りの喧騒にかき消されて、大声を出さなきゃ声が伝わらない。

「ああ！ 向こうにミーナがいるから、挨拶しに行こーぜ！」

アギトも喧騒に負けずと声を張って喋る。

そうだ、まずはミーナに挨拶に行かないと。僕たちは波寄る人波を掻き分け、なんとか魔王城の outlet、ミーナの居る場所にたどり着いた。

風に揺れる亜麻色の髪、そして髪と同じ色の瞳、額に汗をかきながら必死に働くミーナの姿は、なんだかものすごく綺麗に見える。

ぼーっとミーナを見つめていると、どうやら僕の視線に気づいて、こっちを振り向いた。あわてて視線を外す僕。なんだか、すごく恥ずかしい。

「ヤマト様にアギトさん、来てらしたんですね」

店をまかせてミーナが来た。アギトのが移ったのか知らないけど、ミーナの笑顔を見たら妙に緊張してきた。

「うん。ミーナたちは何売ってるの？」

自然に言えただろうか。顔が赤くなってるかもしれない。今日ばかりは紅い光の届かないこの町が恨めしい。

「はい、魔王城からは、以前ヤマト様も食べたことのある、コルカの焼肉を売ってるんです」

コルカ、それはあの超ジューシーでほつぺたが落ちそうなほどおいしかったあの巨大な肉だ。

「じゃあ、僕も買おうかな。アギトも食べる？」

そう言っアギトのほうを見るが、答えたのはミーナだった。

「アギトさんはさっきフレイアさんと二人で買いに来てくれたんですよ」

ほほう、それは興味ありますね。どうやらじっくり話を聞いたほうがよさそうだ。

ニコリと微笑むミーナと、必死に僕から目を逸らすアギト。それから僕たちはしばらく話していたのだけど、ミーナがお店に戻っちゃったことで、僕たちは再び移動することにした。

人波を避けつつ歩く僕とアギト。そして僕の手には、何個かのコルカの焼肉がある。色々とミーナから聞き出そうとする僕を止めるた

めにアギトが買ったものだ。

にんまりご機嫌な僕とは対象的に、アギトはげっそりとしていた。僕が言うのもなんだけど、きつと精神的に疲れたのだろう。

しばし適当にぶらついていた僕たちだが、不意に背中を冷たい何かで撫でられたような感覚がした。

「……っ！」

素早く振り向き、後ろを確認する。しかし、何も見当たらない。レーヴァンティンに着いてからずっとなのだが、なにやら視線を感じるのだ。

「どうしたんだ？」

アギトが不思議そうに聞いてくる。どうやら気づいていないようだ。でも、確かに感じる、この体中を這いずり回るようなこの気持ち悪い感覚は、誰かに観察されているような感じがするのだ。しかも、まるで町全体から見られているような、そんな感覚だ。

不安そうな僕に、アギトがなにかあったのかと聞いてくる。僕はなんでもないと答えた。何故なら、アギトが気づいていないのなら、もしかしたら僕の勘違いかもしれないからだ。

不安は途切れない。でも、アギトが居るから大丈夫。僕はそう思っていた。

始まりの収穫祭（3）

時折感じる違和感を無視すれば、収穫祭はとても楽しい物だった。山のように積まれたエルツの実や、水魔族のお姉さんの売るグロテスクな魚など、食べ物が町に溢れ返っているのだ。

『レナ・メルレルト』その言葉通り、これらは月の光によって育まれたのだろう。どれもが不思議な色合いをしていた。

きつと、魔界の中心と言えるくらいなのだから、魔界全ての食べ物都在这里集まっているんだろう。

僕とアギトは、その中でもお気に入りのエルツの実をかじりながら、そろそろ帰ろうかと話していた。

いくらレーヴァンティンが大きい町だと言えども、実際に祭として賑わっているのは、大通りなのだ。

丸い町を綺麗に三等分したようにある大通りは、それぞれ獣魔領、水魔領、竜魔領に向かって延びていて、町を囲む巨大な壁に設置された門に繋がっている。ちなみに魔王城からは、獣魔領側の扉から入ることになる。

というわけで、実際には町の殆どは普通の住宅街なのだ。そんな所に行ってもお祭りはやってないだろう。

収穫祭で最も賑わっているのは、町の中央に鎮座する巨大な噴水広場だ。水を変幻自在に操る噴水の頂点には、最強の魔剣として名高いレーヴァンティンを模したものが突き刺さっている。

ここも僕のお気に入りの一つ。そして、ちょうど僕たちが噴水広場

を通り掛かった時だった。

溢れる魔族。その人波を縫うように掻き分けていると、その人波の中で一人だけ異質な存在を見つけたのだ。

マントについたフードを目深に被り、まるで人波など無いように歩く人物。それは、まるでアギトが歩いているかのように流麗な動きだった。

何故か、その人物に僕の視線は釘付けになった。

まるで、急流の中を優雅に泳ぐ葉のような軽やかさだ。

僕が見てる間にも、その人物はスイスイと身軽に人波の中を進んで行く。

時が止まったかのように僕は見入った。

そして、雑踏の影に見えなくなる直前、その人物がチラリとだけこっちを見た。

視線が合う。

宝石のように輝くその瞳は、まるで澄み渡る青空のようだった。

「おい！」

急に肩を掴まれて、僕は立ち止まっていた事に気が付いた。振り向けば、訝しげな表情のアギトが僕の顔を覗いている。

「お前、やっぱり今日おかしくないか」

真剣な表情で聞いてくるアギト。

今の事を話すのは気が進まなかった。それは、碧い瞳あおをした人が振り向いた時に見えたその顔が、とても美人な女の人だからだ。

見惚れてたとかからかわれるのがオチだ。

「な、なんでもないよ」

慌てて否定する。そうか、と言ってなおも真剣な顔をしているアギトをよそに、僕は碧い瞳を持つ人物が消えた人波を、ずっと見ていた。

祭りの余韻を感じつつ、僕たちは帰路に着いていた。忙しそうにコルカの肉を焼き続けるミーナに別れを告げ、レーヴァンティンの巨大な門をくぐったのは少し前のことだ。

闇に浮かぶ不気味な植物の陰に囲まれて、魔王城への上り坂を歩く僕とアギト。

満腹感に満ちた僕は、早くも眠気に襲われていた。

「おいおい、そんなふらふらしてないで、しっかり歩けよ」

アギトに言われるけど、人が溢れる町中を歩くだけでも大変だったのだ、疲労だっけかなり溜まっている。

「無理だよー」

もうへとへとです。僕は今^{ひろつこんばいまんぶくばんざい}疲労困憊満腹万歳なのです。

ぐだー、とアギトに寄りかかる。アギトだってあの人波の中を歩いたのに、どうして何でもないような顔していられるのが不思議でならない。

「ったく」

文句を言って、嫌そうに僕を振りほどきつつも、歩くペースを下げてくれるアギト。僕もまたゆっくりと自分の足で歩き出した。

どれくらい、歩いていただろう。もうすぐ魔王城が見えそうな場所まで来た時に、急にそれは来た。

「……っ！」

額に走る針で刺されたような痛み。僕はたまらず地面に膝を着いた。自然と体が震えだし、自由がきかなくなる。

見上げれば、アギトが今まで見たことのない強張った表情をしている。

「来たか」

小さく呟くと、アギトは腰に携えていた剣を抜いた。

雷帝剣フィビト。僕は、その剣が抜かれたところを一度も見たことがなかった。訓練でも一度も抜かれなかったその魔剣、刀身は薄く光を放ち、紅い月光の下で、まるで雷を纏ったように電気を帯びて

いる。

僕は何が起きているのかわからなかった。急に痛み出した額、体の異常な震え、なにかが起ころとわかっていたかのようなアギトの態度、そして、この異常な空気。

僕たちを覆う空気が、明らかにガラリと変わったのだ。重く、体に纏わり付くようなこの感覚。冷たく射抜くような視線を感じる。

初めて感じたであろうこの気配は、
殺気。

そこまで考えてから、僕は自分の剣に手をかけた。震える手は意思に背き、掴もうにもうまく握れない。

考えることはたくさんあった。でも、今は自分の身を守ることが先決だ。

でも、いまだ剣を構えられない僕を置いて、事態は急展開を迎えようとしていた。

第九話：月下の死闘（前書き）

この話はアギト目線です。

第九話：月下の死闘

辺りを照らす紅い月、風に揺れる木々、遠くに聞こえる収穫祭の音、どれもさつきと変わらないのに、この場の空気だけがどんどんと緊張していく。

背後にヤマトを庇い、俺は相棒の感触を確かめた。見た目よりも遥かに重いこの剣は、戦闘においてかなり頼りになる。この魔剣は、魔界を旅していた時に倒した魔獣から作られたもので、その魔獣の特徴を引き継いで雷に特化している。

後ろを確認すると、ヤマトが恐怖で動いていないようだった。しょうがないだろう。あいつは訓練によって感覚がかなり鋭くなっている。だから、初めて感じる本物の殺気に対して耐性が無い上に、さらに敏感に体が反応しているのだ。

赤く照らされててもわかるほどに真っ青な顔したヤマト、必死に剣を構えようとしているみたいだけど、どうやら自分の身を守ることなど無理そうだ。

周囲を見渡すが、この殺気を放つ相手は見られない。それはそうだが、もし見える所にいたら、確実に魔人部隊の誰かが気づくはず。なぜなら、ヤマトも薄々感づいていたみたいだけど、俺とヤマトの周囲では魔人部隊の面々が警備しているのだから。

まあ、なんであんなに過敏に反応したかはわからないが…。

気配もないし、敵は遠距離に居る。そう確認したところで、殺気の密度が膨れ上がった。背後で息を飲む音が聞こえた。

そんなにびびらなくても、俺が居るから大丈夫だっていうのにな。

来たっ！

魔剣に魔力を流しつつ、攻撃が来るであろう方向へと剣を振るう。

シュパアアン！

フィビトの刃が、軽々と敵の攻撃を切り裂いた。左から真直ぐ一直線に走ってきた光の線。おそらく直撃したら、簡単に体を貫通して余りある威力を秘めていただろう。だがしかし、俺の相棒に切れない物など存在しないっ！

湧き上がる高揚感を沈めつつ、状況を判断する。今の攻撃からわかる通り、敵はかなりの使い手だ。何故ならば、今の攻撃で使われたのは明らかに魔法、そして、魔法で長距離攻撃というのはかなり難しいのだ。魔法は想像力で生まれる代わりに、想像の及ばないことは出来ない。つまり、より遠くに攻撃を仕掛けたくても、普通は自分が見える範囲までしか魔法は行使できないものなのだ。見えない場所からの長距離攻撃、少なくとも俺が出来るような代物じゃない。そしてなによりも俺の気持ちを高ぶらせる事、それは、この攻撃がヤマトではなく俺を狙ったものだということだ。

おもしろい。あからさまな殺気といい、この俺に喧嘩を売るとは楽しませてくれんだろうな。

久々に血が騒ぐのを感じた。

「ヤマト、どうやら俺をご指名のようだから、ちよっくら顔拝んできるか」

そう言い残して、地面を蹴る。やばい、顔がにやついてしまうがな。ヤマトのことはグレイがなんとかするだろう。今の攻撃をして

きた奴ほどの使い手などそうそう居ないだろうし、もともと魔族で集団行動を好むのは人魔くらい。これほどの魔法の使い手、おそらく水魔だ。興奮する気持ちを抑え、木々の間を縫って飛ぶ。背後で、足場に使った木が吹き飛ぶ音がした。

居た。

気配はすぐに現れた。恐らく木々の少ない高台に居る。えらくなめられたものだ、敵は単独、そしてこの気配は……。

最後に大きく跳躍して敵を見下ろす。月明かりに照らされた相手、マントにフードと姿を隠しているが、こいつは確実に人魔だ。向こうも気配で気づいていたのだろう、敵の周囲を強力な魔力が覆っている。

臨戦態勢はばっちしってか。

こちらも魔剣に魔力を滾^{たぎ}らせる。まずは一発、派手にお見舞いしてやろうじゃないか。

「吼えろ、ファイビトオオツ！」

全力で剣を上段から振り下ろす。空間を切り裂く確かな手ごたえ。上空で振り下ろされた刃は空気を斬り真空を生み出し、その真空破は稲妻を纏って巨大な斬撃となる。

辺り一面を吹き飛ばすほどの威力を持つ、俺の得意技『雷帝の咆哮』。その名の通り、世界が揺れると錯覚させられるほどの轟音が爆発した。

舞い散る粉塵、跡形もなく吹き飛んだ周囲の木々。やりすぎた。これじゃあ、相手も跡形もなく吹き飛んだに決まってる。もつと楽しむつもりだったのに。

そう思ったけど、どうやら相手をなめてたのはこっちのようだ。舞い上がった粉塵を風がさらった後に現れたのは、何もなかったかのように無傷で立つ敵だった。

周囲の状況と見比べて、明らかに異常。あれほどの攻撃を真正面から受けて、マントにフードというその姿まで全く変わらない。

口が歪に笑うのがわかった。楽しい。やばい、収まらない。この技を受けてこれだけ余裕を持つ敵など初めてだ。ガラルドでさえ膝を着いた。

高揚する体とは別に、脳が冷静に次の攻撃の手を考える。どうやってあの攻撃を防いだのかはわからないが、おそらく魔法で対抗したに違い無い。ならば直接斬ってしまおう。

神速の踏み込みと共に横一文字に斬る。だが、敵も素早い身のこなしで攻撃の範囲から飛びのいた。だが今であることがわかった。

「……お前、女か」

俺はフードで顔を隠す相手に話しかけた。マントで体つきは隠れているが、性別くらい動きでわかる。

しかし、フードの女は無言で腕を振り上げた。途端に光を放ち始める地面。

やべ！

そう思った瞬間、お返しとばかりに地面が爆ぜた。

月下の死闘（２）

空中で体勢を整えた俺は、なんなく着地した。何とか後ろに飛んで、爆発をかわすことができた。

こめかみを流れる血の感触。どうやら石の欠片でも掠ったか。

それにしても、まさか人魔にこれほどの奴が居たとはな。

そう考えて、そういえば自分も人魔だったと気づく。

人魔は他の種族の戦士に比べると、遥かに見劣りする。それは武器を使わなければ戦えない、肉体の弱さの所為だ。そして魔法に関しても水魔には遠く及ばない。

「あの身のこなし、魔法、今までどこに隠れてやがったんだ」

少なくとも、俺が魔界を旅した時は、こんな奴の噂さえ耳に入らなかった。これだけの強さ、噂にならないはずがないのに。

「まさか…いや、ありえねえか」

向こうの奴がこんな所に居るはずがない。

思考はすぐに遮られた。先ほどの爆発でできた粉塵の中で、チカリと何かが光った。収束される魔力の気配。

ふん、芸の無い奴だ。

つまらなく感じながらも剣を構える。様子から考えて、これはさつき長距離から攻撃してきたときの魔法だろう。こんなもの、簡単に

切り裂いてくれる。

魔剣に魔力を通わせる。迎撃体勢に入ったところで、ありえない状況に気づいた。

どんどん増えていく光。十、二十、三十、五十……、前方はまるで壁のような光に包まれた。

こんな魔法、想像できるものなのか!?

魔法は全て認識してないと霧散してしまう。これだけの量の魔法を認識し続けるなんて、不可能だ。

しかし、現に相手はそれを行っている。今重要なのは、いかにしてそれを防ぐか。

風を纏い、脚に力を籠める。爆発的な瞬発力を持って、俺は地面を蹴飛ばした。

途端に光の雨が、俺の居た場所に降り注ぐ。光線が空気を切り裂く音と、地面に穴を開ける音が鳴り響く。一歩踏み出す度に、背後ぎりぎりを光線が掠めていく。撃ったそばから光は収束し、新たな光線を放たれ、まるで途切れる様子はない。

全てを斬るのは無理、ならば、避けきれない最低限の攻撃だけを防ぐしかない。光の雨の中を、縫うように突き進む。なるべく体勢を低くして、這うように走る。始めは全てかわせていたものの、しだいに剣で弾くものが増えていく。どうやら、攻撃の数がどんどん増えていくようだ。

しかし、俺もいつまでも防御しているつもりは無い。敵を中心に円を描くように走り、しだいに円が小さくなるように距離を詰めていく。

わかったことは三つ。まずは、敵の攻撃はあまり精度がよくないということ。恐らく、俺の速さについていくために、命中率を数で補^{おぎな}っている。次に、一つ一つの光線が直線的すぎる。少しでも軌道を変化させられたら、かなり命中率が上がるはずだ。最後は、この有り得ないほどの魔力だ。これほどの魔法を行使しているのに、攻撃は止むどころかどんどん増えている。これには確実になにか種があるはず。

そして、以上の事から俺が導き出した結論、それは……。

先ほどまで舞い上がっていた粉塵も、今はほとんど晴れていた。光の壁の向こうに見え隠れする、敵の姿。

それを確認して、俺は精神を落ち着かせた。語りかけるは自分自身。創りだせ、絶対無敵の衣を。

全てを拒む、最強の鎧を。

こんなみみっちいことは止めて、正面衝突しようじゃないか。

光線を避け続ける俺の体が、しだいに放電し始める。

想像するのは最強の自分。全てを焦がし、全てを切り裂く雷の化身。魔力が俺を包み込み、足元から頭まで達したところで、変化は現れた。

人魔が他の種族に勝つためにはどうしたらいいか、そう考えた結果行き着いた俺の答え。

それが、全身を覆う魔法による甲冑だ。いつの間にか、俺の体は白銀に輝く装束に包まれていた。

光線を避けるための動きを止める。広範囲を打ち続けていた光線が、とたんに俺に収束しはじめる。

「遅いつ！」

敵に向かって、一気に加速していく。避けることなど考えず、ただひたすら一直線に走る。今俺に向いている以外の光線が、標準を合わせるよりも速く。

円を描くように走る俺を追いかけて、光の壁は移動していた。しかし、壁のような密度のまま俺の速さに対応するのは不可能だったのだろう、その壁はいまや、隙間だらけになっている。

そして、俺と相手を結ぶ位置にある光線だけを防御して走れば。

ほうら、光の道の出来上がりってね。

音速を超えようかといった具合の速さで、光の道を突き進む。剣を正面に構え、光を切り裂きながら、壁へと肉薄する。正面から来る光線以外は、完全に俺の速さについてこれていない。

壁を構成していた光の発生源の一つを、魔剣が貫いた。何かが割れるような音。壁の向こうにはもちろん。

「ひさしぶりだなお嬢さん」

「……くっ！」

焦りの声を上げる相手。当然だ、まさか正面から突破されるとは思

つていなかっただろう。確かに『雷神』を纏っていなかったら、難しかった。白銀に輝く魔法衣『雷神』。それは雷の圧倒的出力を纏う事によって、限界を超えた加速と防御を可能とする。

相手は再び距離を取ろうとするが、そんな事はさせない。なにより、もう種は分かつてる。

足元に高速で広がっていく不思議な紋様。円形に描かれたそれは、紛れもなく 魔法陣。

考えるよりも早く、魔法陣の描かれた地面を切り裂く。まだ完成していなかっただろうそれは、淡い光を放って消えた。

光の壁の内側を見てみれば、びっしりと小さな魔方陣が敷き詰められている。当たりだ、やはりこいつは法術使い。以前に一度だけ法術使いを見たことがある。でも、これは本来人間が使うような代物だ。なぜなら、人間が少ない魔力を使って、大気中や地中を流れる自然界の魔力に働きかけて魔法を行使する、それが法術だ、そもそも魔力を豊富に持つ魔族には必要ない。まさか人魔で法術をここまで極めたものがあるなんて、考えたこともなかった。

「残念。また爆発でも起こそうってつもりだったのか？」

「……」

だんまりってか。まあとりあえず、動けなくしちまうか。

空中に五つの雷で出来た球体を作り出す。わざとかわせるような速度で放ち、よけたところを、雷を纏った拳で思いつきぶん殴った。

「……っ！」

声にならない声を上げて軽くぶっ飛ぶ相手。まあ、これでしばらくは動けないはずだ。

それにしても、なんだってまた人魔が攻撃してきたんだ？ 時期的に考えて、ヤマト狙いだと考えるのが普通だが、人魔が魔王候補を狙うなんてことがあるのか？

いや、どうせ裏に誰かがついてるのだろう。こいつはさしずめ捨て駒ってところか。

ひんやりとした風が吹く。見渡せば、森の一部だったこの場所は、ぼろぼろの荒野になってしまっていた。なんとも風通しのよくなっ

てしまったものだ。

「おい、女」

いまだぼろ雑巾のように倒れてる相手に、ゆっくりと近づいていく。すでに『雷神』は霧散してしまって、周囲に漂う魔力と同化してしまっている。いちおう警戒して魔剣に魔力を通わせておき、目の前までいって、俺は剣の刃を向けた。

「お前、いったいだれの差し金だ」

答えなければ殺す。そう伝わるように殺気を滲ませて言う。

しかし、いつこうにしゃべらない相手。まさか、気絶してるわけじゃないだろう。

「ちつ、しょうがねえな」

とりあえず、顔をおがもう。こんなフードを被られてちゃ、話し辛いからな。

俺がフードに手を伸ばしたとき、急に周囲の温度が変わった。思わず手を止めて、女を見る。どんどん上昇していく温度。そして、その高温の発生源は、紛れもなく目の前のこの女。ゆらりと、まるで幽鬼のように女は立ち上がった。

「……い」

女が、小さい声で何か呟いている。小さすぎて聞き取れない。しだいに赤く発光していく女の周囲。濃厚な魔力が渦巻きだす。

どうやら楽しくなってきたようだ。どうやらこの女、まだ本気を隠している。再び、高揚感が押し寄せてくるのを感じた。少し距離を取り、剣を構える。

急激に加速していく温度上昇。ああ、予想以上の収穫だ。まだ戦いを続けられるなんて、次はどんな攻撃を仕掛けてくるのだろうか。緊張感が増していき、再び戦いの火蓋がおりされようとした時だった。

「やめておけ」

唐突に入り込んできた、第三者の声。

「だから言ったのだ。お前一人じゃ無理だと」

意外な乱入者。そいつはなにくわぬ顔で、この場に現れた。水が差

したと、一瞬激しい激情に襲われたが、声の主を理解したとたん、俺は喜びの表情を浮かべた。

しだいに下がる、周囲の温度。どうやら女の本気は見れなそうだが、でも、代わりにもっと面白そうな奴がきた。口元が歪むのがわかる。やっぱり俺は、血に飢えた獣のようだ。いつかもう一度、お前と本気で戦いたいと思っていたよ、訓練じゃなく、戦場で。どうやら今日の運勢は最高のようだ。友よ、お前は最高の瞬間に現れてくれた。これでお前を正々堂々とぶち殺せる。その台詞、その登場、俺の敵以外ありえない。

あくまで冷静に、俺はそいつに問いかけた。

「よう、ガラルド」

第十話：決意

ものすごい速さで後ろへと移動していく周囲の木々。肌に感じる強い風。お腹を圧迫する強い衝撃。僕は今、担がれていた。

アギトが居なくなっただけからすぐに、僕は魔人部隊の面々に囲まれた。状況を飲み込めずにいる僕を置いて、グレイにいきなり肩で担がれ、そのまま移動を開始したのだ。無言で僕を魔王城へと運んでいくグレイ。周囲を囲んでる隊員も、誰もが真剣な顔をしている。僕はまだまだ震えの納まらない体を、どうにも出来ないでいた。

段々と魔王城へと近づいてくる。そのことが少し僕に余裕を与え、どうにか質問をするまでに回復した。

「……ねえ、何が起こってるの？」

グレイに問いかける。質問を無視して、無言で正面を見続けるグレイ。その顔は、いらついているような、焦っているような、そんな表情だ。僕とグレイを囲むように走る他の隊員達も、みな深刻な顔をしている。ざわりと、僕の胸が騒ぎ立つ。全く動いていなかった頭が、少しだけ機能した。やはりとんでもない事が起きて伊いいるんだ。思い出したのは、あの心臓を驚づかみにされたような、あの感覚。

殺されるかと思った。

体の震えが、また強くなる。あの時、とつさに剣を抜こうとしたけど、恐怖で剣を握ることさえ出来なかった。あれは、あんな気配は初めてだ。訓練では感じたことのない、身の毛もよだつような気持ち悪い感覚。あんなものの前では、剣なんて意味がない、そう思わせるほどの、圧倒的な力の差を感じた。いまだズキズキと痛む頭で、

僕は必死に今の状況を把握しようとする。落ち着け、まずは落ち着くんだ。深呼吸をしよう。あの殺気の相手、そしてその目的はなんなのか。まるで攻撃が来るのをわかっていたようなアギトの台詞も気になる。思考を廻らせようにも空回りするだけで、時間だけが過ぎていった。

いつの間にか、魔王城のすぐ近くまで移動していた。魔王城という大層な名前に負けないような、立派な門がもう見えるほどに近づいている。石造りの重厚な雰囲気を感じさせるその門は、高い城壁で囲まれている魔王城に、僕の知る限り唯一入れる箇所だ。

速やかに城門に近づいたところで、巨大な門ではなく、そのすぐ隣に設けられた小さな扉が音もなく開かれる。魔王城の敷地内に入ったところで、いきなり僕は放り投げられた。どさつと芝生の上に落ちる僕。急だったから受身が取れなかった。いや、きつと急にじゃなくても、この震える手足じゃとても受身なんてとれなかったか。ひんやりとした芝生が、僕の顔に当たる。

「ここはもう安全だ。貴様は部屋にでもいろ」

簡潔にそう言っ、僕から視線をそらすグレイ。冷たい態度はいつも通りだけど、その表情は相変わらず硬いままだ。グレイや他の隊員は、門の中に待機して外の様子を眺めだした。

僕は地面に叩きつけられた衝撃よりも、状況を整理するのに必死だった。なんで、どうして、どんな理由でこんなことになったんだ。地面に転がったままなの気にせず、それだけを考える。いや、本当はわかっているのかもしれない。認めたくないだけなのかもしれない。いやだ。それだけは認めたくない自分が居る。だって、だって、なんで僕がこんな目に……。

「僕を、殺しに来た……？」

言ってみて後悔した。僕を殺しに来た。言葉にしたら、ストンと胸の中に真実として居座ってしまった。そうだ、今までだつてずっと護衛が着いていた。何のために？ それは僕を護るため。護る必要があったから。なんで僕が狙われなきゃいけないんだ。魔王は魔界にとつて救世主じゃないの？ 魔界は僕がいなかったら戦乱に見舞われるんじゃないの？

「いやだ」

どうして僕の命が狙われる？ あの時感じた殺気、あれは本気だと絶対殺すといった怨念染みたものを感じた。なんで、どうして僕が恨まれる？ 僕が何をしたっていうんだ。普通に生活していた僕を、勝手に召喚したのはこの世界じゃないか。

「いやだ」

誰か助けてよ、僕を護つてよ、僕を、僕の世界を壊さないで。これ以上居場所を奪わないで。

「いやだ！」

不意に、右頬を強い衝撃が襲った。あまりの勢いに転がる体。

「黙れ！」

いきなりの衝撃に目を白黒させた僕は、握りこぶしを震わせて僕を見下ろすグレイを見上げた。あまり感情表現の豊かではないグレイ

の、こんな怒った顔は初めて見た。鋭い目で射抜くように僕を睨む。倒れこんだまま僕の首元を掴むと、乱暴に持ち上げた。

「そんなところでびくびくしてるな、目障りだ」

膝立ちの状態になった僕は、グレイの目から視線が離せなかった。心の底からの怒り、瞳に宿るそれを受け流すことなんて、僕には出来なかった。でも……。

「……にすんだよ」

怒りが込み上げてくる。こんなことになったのは誰のせいだ。僕を関係ないことに巻き込んだのはお前ら魔族だろ。僕の意味に關係なく巻き込まれたのに、なんで命を狙われんくちやならないんだ。

「なにすんだよっ!」

思いつきりグレイに殴りかかる。簡単にかわされるけど、それでもかまわずに殴りかかる。こんな、理不尽な状況に対する怒りを乗せて、何度も何度も殴りかかる。そのうち、僕の頬を涙が流れ始めた。

「この世界に、来たくて来たんじゃない。魔王候補になりたくてなつたんじゃない。僕は、僕は……」

後半は言葉にならなかった。涙が止め処なく流れる。僕は居場所がほしいだけ。独りで放り出されたこの世界に、自分の居場所がほしいだけなんだ。空を切る拳はしだいに力をなくし、僕は地べたに座り込んだ。僕は子供だ。自分でそう思う。一人じゃ心細くて、何も出来なくて、誰かに護ってもらいたくて、それが僕なんだ。

決意（2）

あの後、城の中から出てきたブルドによって、僕は結局自室に連れてこられていた。考えるのはアギトのこと。あの殺気を感じた直後、すぐに単身敵のもとへと向かってしまった。無事なんだろうか。ベッドの上で、布団に包まれながらそんなことを考えてる自分に嫌気がさす。アギトは僕のために戦っているというのに、僕は安全な場所でびくびくと怖がっているだけなんだから。

あれから、どれほどの時間が経ったんだろう。

もうずいぶんとこうしている気がする。もしかしたら、アギトはもう帰ってきているのかもしれない。様子を見にいこうか。そう思いはしても、実際に行動には移せない。布団から出たくない。一番安心できる場所はここだから。

コンコン、と部屋の扉が叩かれた。

もしかしたら、誰か殺しに来たのかも。以前と同じようなことを考えてる自分を、なんとか落ち着かせようとする。僕にとって、一番安全な場所はここだ。もしここが信じられなくなったら、それは僕が殺される時だ。

「……………」

布団に顔まで埋めたまま、僕は返事をした。声が震えていた。その情けない自分に、苦笑いする。入って来たのは、ミーナのようなだった。もう祭りが終わるほどの時間が経ったのか。失礼しますと言って、ベッドの横まで来るミーナの気配。

「その、大丈夫ですか？」

心配そうなミーナの声。なにが大丈夫なんだろう。僕は大丈夫に決まっている。だって、当事者のくせに、アギトに全て任せて一人だけ安全な場所に居るんだから。僕は心配されるような価値なんて無い存在なんだから。

「……話は聞きました。まだ、アギトさんは帰ってきてないようです」

「本当に!？」

僕はその情報に、思わず布団から飛び起きた。

アギトは僕の中で最強の存在だ。実際の強さを目にしてきたし、アギトが誰かに負けることなんて想像できない。だから、僕は心の中では、アギトだったなら簡単に敵を倒して、すぐに帰ってきてという期待があった。

僕の行動に驚いたのか、ミーナは目を大きくして僕を見つめている。

「どうしたんですか、その顔」

言われて思い出す。そういえば、けっこうな強さで 그레이 に殴られたんだ。いちおうブルドに治療してもらったんだけど、口の中も切ったし、たぶん今は腫れてひどい顔をしてるだろう。でも、僕にそれを説明する余裕なんてなかった。不安が胸を支配する。もしかしたら、僕のせいでアギトは殺されたのかもしれない。僕なんかを護るために。こんな、臆病で何の役にも立てないような僕の。

「僕のせいだ」

自分の体を抱きしめる。そうしないと、何かが壊れてしまうような気がしたから。アギトが負けたって決まったわけじゃないけど、まだ帰って来ないってことは苦戦してるってこと。つまり、あのアギトでさえてこずるほど強い敵だったんだ。怖いよ。アギトが居なくなってしまうかもしれないというのが、とてつもなく怖い。不意に、震える僕の手に暖かいものが触れた。ミーナを見れば、心配そうに僕を見て、優しく手を握ってくれている。やめて、そんな目で僕を見ないで。ミーナの栗色の瞳が、その暖かい眼差しが僕の胸を抉る。そんな優しくされるような権利なんて、僕には無いのに。

「そんなに、自分を責めないでください」

「……そんなの無理だよ。だって、狙われてるのは僕なんでしょ？アギトにもしもの事があつたら、僕は……」

「アギトさんに、もしもの事なんて起こるはずがないじゃないですか。アギトさんを信じてください。すぐに、いつもの笑顔で帰って来ますよ」

そんなの気休めだ。そう思ってるのに、ミーナの言葉をすぐに信じてしまいそうになる自分がある。それは楽だからだ。誰かにそう言ってもらって、それを無心で信じるのが一番楽だから、すぐにそれに縋ってしまいたくなる。

「やめてよ！ そんなの根拠がないじゃないか！ 気休めなんかいらない！」

ミーナに八つ当たりなんかしたくないのに、口からはこんな言葉し

か出ない。

「僕のせいでアギトが危険な目にあうなら、僕は魔王なんかにならない！　そもそも僕に魔王なんて器なんかないんだ！　こんな弱くて、怖がりで、役立たずで、僕に魔王なんて始めから勤まりっこないんだから！」

嫌だ。ミーナは悪くないのに、悪いのは僕なのに。僕はまるで吐き捨てるように、言葉をミーナにたたき付けた。

ミーナはただ黙って僕の話しを聞いている。どう思っているのだろう。こんな自分勝手に、醜い僕は、ミーナの目にどう写っているんだろうか。

自分でもわからない内に、僕は泣いていた。

何もかもが嫌になる。自分の身も護れず、アギトが戦っているのに一人安全な場所でびくついて、心配して来てくれたミーナには八つ当たりして、そんな自分が、たまらなく嫌いだ。

いつだってこの城の人は優しくしてくれた。魔王になるかも決めない、問題をただただ先送りしてる僕に。もしからしたら、僕が魔王になることを放棄するかもしれないのに。

部屋に響く僕の泣き声。全てが僕を批難してる気がした。皆の今までしてくれた優しさ、僕への期待、この城で過ごした時間、この魔界という世界が全て敵のような気がした。

だって、結局僕は誰かに甘えてきただけなんだ。みんなの優しさを利用して、魔王になんかなるつもりもないのに、誰かがどうにかしてくれるって期待して生きている。

「だから、僕に優しくしないで……」

僕は自暴自棄になっていた。醜い自分を、これ以上曝さらしたくなかった。こんな僕は嫌われて当然なんだ。

だけど、ミーナは優しく抱きしめてくれた。優しく、まるで愛でるように。僕は温かい体温に包まれる。どうして、どうしてそんなに優しくしてくれるの？僕は最低な奴なんだよ？

涙が、止め処なく流れる。

「そんなに、自分を傷つけないでください」

優しく、何度も頭を撫でられる。

「ヤマト様は、何も悪くないんですから」

その言葉に、少しだけ顔を上げる。どうしてそんなことが言えるのだろうか。

「どうして魔王が狙われるか、ヤマト様は知っていますか？」

唐突な質問。僕は素直に首を振った。

「魔王はあたしたちにとっての希望です。それは、人魔だけでなく、魔界で虐げられているものたち全ての希望なんです」

そこで、ミーナは少し間を取った。僕にどうやって説明しようか、言葉を選んでいるようだった。

「魔界では、力が全てなんです。力の弱い者は強い者の命令には逆
らえない。逆らえば殺されてしまう。魔界は、そんな世界なんです」

僕は心臓が止まりそうになった。だって、僕の知る魔界はとても平
和で、町だつてとても賑やかでそんな様子どこにもなかった。

「ヤマト様は知らないと思います。ここでは、そんなことはないで
すから。魔王城とレーヴァンティンは、魔界で唯一、弱者が自由に
生活できる場所なんです」

自由。その言葉のところに、ミーナの気持ちが妙にこもってる気が
した。なんだか話がずれてってる気がするけど、ミーナが真剣に話
してるから、僕は黙って話を聞くことにする。

「最強こそが頂点。魔界では誰もが最強に憧れて、自分こそが最強
だと言う人に溢れてる。どの種族も、自分こそが最強だって証明し
たいと思ってる」

それは、つまり……。

「魔界は、魔王を望んでいないんです」

決意（3）

「魔王が、必要ない？」

それはどういうことだ。だって、僕は魔界に必要なだから呼ばれたんじゃないの？　僕は魔界の戦乱を回避するためにここにいるんじゃないの？

「そう、魔界は魔王を求めている。ヤマト様は魔王の力がどういうものなのか、ご存知ですか？」

「ブルドからは魔王にふさわしい力としか聞いてないけど……」

「魔王の力、それは魔法の異常なまでの強化と、相手を絶対服従させる力です」

淡々と、ミーナは言い切った。魔法の強化と……相手を服従させる力？　それってまさに絶対無敵じゃないか。魔法の強化がどれほどのものかはわからないけど、相手が絶対に服従するなら誰が相手だろうと絶対負けない。いや、そもそも敵なんて存在しようがないじゃないか。

「魔王ノ月が放つ光を浴びることによって、魔王候補は第三の瞳が開き、魔王として覚醒します。そして魔王になった者は魔界の頂点に立ち、獣魔、水魔、竜魔、そして人魔を統べる王となる。これは魔王の力を持つものにしか出来ないのです」

どうやらわかって来た。

「つまり、魔界を統一するっていうのは魔王の力、『相手を絶対服従させる力』で無理やり全ての種族を従わせるって意味なんだね？」

頷くミーナ。確かにそれなら簡単に統一出来る。自分の意思に関係なく、相手は僕の命令を聞くしかないのだ。僕が魔界を統一すると言えば、魔界は統一するしかないのだから。でも、そこで問題になるのが、人魔以外の種族は、魔王による魔界の統一を望んでいないということ。だから、僕の命は狙われる。それはそうだ、したくもない事を無理やりさせてしまうような力の持ち主なんて危険極まりない。

言いづらそうに、ミーナは口を開く。

「でも、相手を服従させる力は、強い力を持つ者には効きづらいんです。だから、もしヤマト様が魔王になったとしたら、一番最初にすることは各種族の王を倒すことになります」

初めて聞く事実には僕は驚いた。でも、それを質問するよりも先に、ミーナは本題に入った。

「これで、どうして魔王が狙われるかはわかったと思います。そしてどうして、あたし達がヤマト様を護っているのかも。でも、……もし、魔王候補があたし達の希望になりえない存在だったら、どうしますか？　魔王候補を護っているのは人魔。でも、その人魔が……魔王候補をいらないと判断した時です」

顔から血が引いていくのがわかった。人魔に要らないと判断されたとしたら。そんなこと考えたこともなかった。僕は反射的に、ミーナから距離を取った。ベッドの上にいるから意味はないとわかっていても、僕はそうするしかなかった。ミーナが言っている意味。そ

れは、僕にとって想像だになかった真実。

「ヤマト様は聡いお方です。そう、魔王候補の命はあたし達が握っているんです」

ありえない。だってそうでしょ？ 僕はいつミーナに殺されてもおかしくなかった。そう、ミーナは告げたのだから。

「魔王候補が人魔によって殺されることは、今までも何度かあったそうです。魔王は人魔の希望。それは魔王が、魔界を平和に導いてくれるかもしれないからです。魔王候補はことは違う世界から召喚される。きっと、この力が全てだという魔界を変えてくれる。でも、もし召喚された魔王候補に、魔界を平和にしようという意思が感じられなかったら？」

この恐ろしい話を、僕はこれ以上聞いていたくなかった。でも、耳を塞ぎたいと思う気持ちとは裏腹に、僕の体は動かなかった。

僕は気づいてしまったのだ。魔王候補というものが、どういうものかを。以前フレイアさんが言っていた。魔王候補が死んだ時、額にあるこの紋章は消えて、魔方陣に勝手に戻り次の魔王候補を召喚すると。じゃあ、魔王になることを放棄したらどうなる？ 紋章は魔王候補が死ななければ、魔方陣に返ることはない。なら、それなら放棄した者はどうなる？

「覚醒する前の無力な魔王候補を殺し、次の魔王候補に期待をかける。歴代の魔王は、そうやって選ばれてきたんです」

放棄した者も殺される。それが答えだ。

「じ、じゃあ、ミーナやアギトもそう考えていたの？ 僕が使えな

いような奴だったら……殺すって」

「……少なくとも、最初はそうでした」

もう何がなんだかわからなかった。どうしてこんなことになったやつたんだろう。涙はとつくに枯れ果てて、僕の心は絶望に支配されていた。

「で、でも！ 今は違います！ ヤマト様はとても優しいし、あたしはヤマト様こそ魔王に相応しいと思います！」

必死に取り繕うミーナ。そんなことを言われても、僕が魔王に相応しくないのは、僕自身が一番知っている。

「……」

僕はもう言葉が出なかった。しゃべる気力もない。僕は殺されるんだ。他でもない、魔界に来て最も信頼してきた友達によって。そんな僕の様子を見て、ミーナが泣きそうな顔をしている。

「本当なんです。信じてください……」

ミーナの声は震え、瞳からは涙が流れた。どうしてミーナが泣くのだろう。僕は代わりのきく魔王候補ではないし、殺すのは君たちじゃないか。

さっきとは打って変わって、部屋にはミーナのすすり泣く声だけが響いた。

僕は考えていた。今までこの魔王城で暮らしてきて、体験した出来

事をだ。あんなに楽しかったのに、全てまやかしたのだだろうか。アギトとたわいもない話して盛り上がった、ブルドの授業で見た、ブルドの以外な一面や、いつでも優しく微笑んでくれるフレイアさん、そして、眩しい笑顔で僕の手を握り締めたミーナ。全てが偽りだったなんて、僕には信じられない。絶対に信じたくない。僕が今信頼できるのは誰だ？ この世界に来て、僕を護り続けてくれたのは誰だ？ それは彼らじゃないか。僕に今出来ることは、信じることじゃないのか。そうだ。彼らが信じられないなら、僕はいつたい誰を信じればいいというんだ。どっちにしろ、僕には選択肢がない。彼らを、ミーナを信じて、それでもだめだったら、その時は僕は死ぬしかない。そう思った。

「わかった。ミーナを信じるよ」

え？ といった表情で、ミーナが顔を上げた。目が、泣いて腫れぼったくなっている。こんなにも本気で僕のために泣いてくれる人を、信じられないわけがない。ミーナの手を取って、もう一度僕は言った。

「信じるよ。ミーナ」

僕は精一杯の笑顔を作った。ミーナが安心するように。これ以上ミーナが泣かないように。なんだか、そう考える自分が恥ずかしい。これが惚れた弱みってやつだろうか。そう、僕はいつの間にかミーナに惚れていたんだ。彼女の笑顔に惹かれていた。だからこんなにも彼女が泣いているのが辛いんだ。僕は決心した。彼女をどこまでも信じよう、そして、彼女を護ろう、そう心に誓った。

でも、僕の言葉を聞いたミーナは、さっきよりも豪快に泣き出してしまった。震える声で、何度もごめんなさいと繰り返すミーナ。今

度は、僕が優しく抱きしめてあげた。頭をなでて、謝らなくていいんだよとつぶやく。きつと、そうせざる得ない理由があったのだ。彼女そして、ほかの人魔の人達にも。

しばらく号泣していたミーナだけど、落ちついたところで、ぽつりぽつりと話し始めた。

「あたしが魔王城に来たのは、アギトさんに拾われたからなんです。あたしの住んでいた村は、獣魔領と竜魔領の間にある、とても小さな人魔の村だったんですけど、ある日獣魔の夜盗に襲われたんです。いつもなら、村にお金や食料が無いことがわかればすぐに帰ってくんですけど、その日は違ったんです。村人を、無差別に殺し始めたんです。村の男の人はバラバラに切り裂かれて、女の人は犯されながら、原型もわからないほどに殴られていました。あたしは、それを食料倉庫に隠れて見てたんです。村に昔からあった、獣魔の嗅覚にも絶対ばれないよう結界のはられた場所。あたし一人だけがそこに隠れて、そこからお父さんやお母さんが殺されるのを、自分が殺されないようにと願いながら見てたんです」

途中、何度もしゃくり上げながら、振り絞るように話すミーナ。僕は、ミーナをなでながら黙って聞いた。

「気がついたら、夜盗はいなくなっていました。呆然と結界から出たあたしは、血のむせ返るような臭いのする村で、たった一人の生き残りでした。そんな時、アギトさんと会ったんです。一緒に村人の体を集めて、お墓を作ってくれました。そして、魔王城に来ないかと、誘われたんです。魔王城に来れば、夜盗に襲われることもないし、平和に生きていける。それに魔王だって召喚されるだろうから、もうこんなことが起こらないようにと、直接お願いできるかもしれないって。あたし、一人だけ隠れて生き残ったのが、本当に辛くて、

だから、魔王様にお願いして、少しでも罪の意識から逃れようとして。あたしは、本当に卑怯な女で……」

最後の方は、聞き取れないほど乱れていた。ミーナは、こんな小さな肩に、そんなに重いものを背負っていたんだ。魔王の存在に希望をかけて、ここまで来たんだ。きっと、代々の魔王達も、同じような思いを言われたんだろう。そして、その度に対応してきた。でもブルドが言うには、魔王が現れるのは三百年に一度だ。人魔の寿命は二百年。きっと、魔王が居なくなる度に、また同じことが繰り返されてきたんだろう。

ミーナの真剣な思いに、僕は答えたと思った。これから先絶対にミーナのような悲しい思いをする子を出したくないと、心の底から思った。

「ミーナ。その願い、僕に叶えられると思うかな？」

ミーナは、僕が魔王に相応しいと言った。僕はそれを信じる。

「はい。あたし達が魔王に求めているのは、優しさ。あたしは、今までヤマト様の優しさを、すぐ近くで見ってきました。自信を持って言えます。ヤマト様こそ、魔界の王に相応しいと」

進むべき道は決まった。叶えよう、愛する人の願いを。導こう、この混沌たる魔界を。僕の一生をかけてでも。

「宣言するよ。僕は、魔王になる」

第十一話：戦いの結末

不意に、部屋が揺れた。遠くから聞こえる爆発音。異常事態を察知した僕とミーナは、急いで魔人部隊の居る正門前へと走った。

「グレイ、何があったの？」

険しい顔をしたグレイ。いつもより深い眉間のしわに、何かよくないことが起こったと思った。周りに待機している隊員たちも、なにやら忙しなく動いている。

「わからん。隊長か、もしくは敵の攻撃の余波だろうとしか言えない」

「まさか……！」

そんな馬鹿な！ アギトの去った方向からして、戦っている場所は魔王城から相当離れているはず。ブルドに聞いたことがあるけど、魔王城は結界によって全方位護られているらしい。それがどのくらいの強さかは知らないけど、魔王城が造られてから一度も破られたことがないというくらいだから、すごい強度を持っているはずだ。離れた場所からここに衝撃が伝わるほどの攻撃なんて、想像も出来ない。これが敵の攻撃だとしたら、いくらアギトでも無事ではすまない。

アギトが戦っているだろう方向を見ても、僕の視界に写るのは、目の前にそびえ立つ閉じられた門と、僕たちを照らす紅い月だけだった。

生暖かい風が、気持ち悪く纏わり着いた。

何かの準備をするかのように忙しく動いていた隊員の一人が、グレイに報告に来た。

「副隊長、準備が整いました、今すぐにも出動できます」

「わかった」

簡潔に返事をして、門へと向かうグレイ。

「ちょっと待つて。魔人部隊はここで待機じゃないの？」

僕は、当たり前のように出動しようとしてるグレイ呼び止めた。

アギトからは、魔人部隊は全員ここで待機するようにと言われていた。それは、アギトが本気で戦う時、その攻撃が味方である魔人部隊を巻き込んでしまうためだ。一度だけ、念を押されたことがある。それは、敵との戦闘で、アギトが戦い始めたら絶対に近寄らないようにってことだ。居ても足手まといにしかない、そう言われたのは、僕だけじゃなく魔人部隊の隊員全員のようにだった。だからこそ、彼らはここで待機していたのだ。

僕を無視して、歩みを進めるグレイ。他の隊員も、すでに門の横に待機している。誰もが何かを決意したような表情をしていて、緊迫した空気が漂っていた。

ここまでくれば嫌でもわかる、彼らはアギトの助太刀に行くつもりだ。

「僕も行く」

グレイの歩みが止まった。

「いけません！ ヤマト様はここに居てください！」

後ろから、ミーナの制止する声が聞こえる。

グレイが振り向き、僕の目を鋭い視線で射抜いた。

「殺気を感じただけで腰を抜かしていた臆病者が、何を言っている。貴様が来たところで邪魔になるだけだ。さっきも言ったが、腑抜けた魔王候補はおとなしく部屋でびくびくしてればいいんだよ」

「僕だって魔人部隊の一員だ！」

自分で思っていたよりも、大きな声が出た。

さっきから、不安が胸を過ぎる。だって、いくらアギトとは言え戦闘に時間がかかりすぎて。訓練の模擬戦闘でさえ、少しの時間で歩けなくなるほど疲れるのに、アギトが戦闘を開始してからどれだけの時間が経ったというんだ。グレイたちだってそう思ったからこそ、こんな行動にでたに違いない。そもそも、これだけ時間がかかるってことは、それだけ苦戦しているということだ。あのアギトが苦戦してるなんて、他の種族との戦闘というものを見たことがない僕には想像もできない。

「貴様、隊長がなんのために戦ってるかわかっていつてるのか？」

「僕と、魔人部隊を護るため……でしょ？」

その言葉に、グレイの表情が歪んだ。

やっぱり。僕はそう思った。考えればわかることだ。

「アギトが居なかったら、今みたいな異常事態はどうしてたのさ？アギトでさえ苦戦する相手なのに、魔人部隊で対抗できるの？そんなの無理だ。僕だってわかる、他のみんなに比べて、アギトは異常なくらい強い。そんなアギトが苦戦するくらいの相手なんだ、足手まといになるのはここにいる全員に言えることだよ！」

周囲の空気が明らかに変わった。より鋭くなる 그레이 の眼光。

「さつきと違ってずいぶん強気だな。だが、貴様になにがわかる！毎日血反吐を吐くような訓練をして、それでも足手まといと言われた俺たちの悔しさが、貴様にわかるか！」

그레이 のすさまじい剣幕にも、僕は一步も引かなかった。

「周囲に流されるだけのお気楽な魔王候補が、わかったような口をきくな！」

그레이 の言葉は、的を射ていた。確かに僕は、この世界に来てからは周りの言つとおりに行動してきた。自分の意思なんか持ってなかったし、先のことだと言って、魔王のことなんてどこか他人事のよゝに考えていた。それでも、僕にもこの世界で得たものがある。決心したことがある。

「アギトを助けたいと思うのは、僕の意味だ！」

この世界でできた大切な友達。気持ちを正直に話すことのできる親友。

「僕は魔王になるって決めたんだ。これから魔王になろうっていうのに、仲間一人助けられないで何が魔王だ！」

あたりが静寂に包まれた。これが、僕の正直な気持ち。なにがなんでもアギトを助けに行きたいんだ。

ふと、一瞬 그레이가笑った気がした。でもすぐにそれは消え、急激に空気が張り詰めていった。張り裂けそうなほどの緊張感。그레이の周囲を、魔力の奔流ほんりゅうが渦巻きだした。心臓を突き刺すようなこの感覚は、紛れもなく殺気っ！

「……何をいうかと思えば。俺は貴様を魔王とは認めない。知ってるか？ 魔王候補なんて、殺せばいくらでも代わりが出てくるんだ。無能な上に腑抜けな貴様など殺して、新しい候補者を召喚したほうがよっぽど魔界のためになるな」

ミーナが間に入って止めようとするのを、僕は手で制した。さっきまでの僕だったら、きっとこの殺気で怯んでいただろう。でも、ここで負けるわけにはいかない！ 護られるんじゃない、護るために僕は行くんだから。

ゆっくりと近づいてくる 그레이。一歩近づいたたびに、殺気が強くなる。

額を、冷や汗が流れた。

「……何があったか知らんが、その言葉、忘れるなよ」

嘘のように消えた殺気。あれ？ と思った瞬間、後ろ首に衝撃を感じた。たちまち暗くなっていく視界。

「う……」

そして、僕の意識は闇に飲まれた。

戦いの結末（2）（前書き）

アギトの目線です

戦いの結末（2）

眩しいほどの紅い光に照らされた巨大な体躯、それを初めて見たものは、きつと絶望と言う言葉を覚えるだろう。それに遭遇してしまったことは、もはや災害にあつたと思うしかないほどの、理不尽な力を『それ』は有しているのだから。

風を切る音。凄まじい勢いで振り払われた超巨大な尻尾が、俺のすぐ傍を通過した。少し遅れて来た風が頬を撫でる。

「はぁ……はぁ……」

回避するための跳躍から着地すると、その勢いで膝が力なく揺らいだ。疲労は明らかで、呼吸も荒くなってきている。さすがにガラルドを相手に一対二はきつすぎた。攻撃の合間に襲ってくるフードの女の撃つ光線が、巧みに俺を追い詰めていく。

「どうした。避けるのに精一杯で、反撃など出来ないか」

ちくしょう、嫌味なこと言ってくれなせ。

普段よりも数段低くなったガラルドの声が、空気を震わせた。

俺は目の前の敵、今や巨大な竜へとその姿を変えたガラルドを見据えた。姿を変えたというよりは、元の姿に戻った、と言ったほうが正しいか。小山のように巨大なその姿は、まさに最強の生物に相応しい威圧感を持っている。鋭い牙に巨大な爪、そして筋肉の鎧の上

に、強固な鱗という最強の鎧を重ね着しているのだ。生物最強の攻撃力を持ち、同じく最強の防御力を誇る圧倒的高位の生き物、それが竜魔だ。俺の五倍はあるうかという大きさの巨体、これで翼を広げたら、まるで飲み込まれるような錯覚に落ちいつてしまう。

視界の端で、何かがチカリと輝いた。来るだろう光線の軌跡を予測して避ける。かわしたところに、巨体に似合わぬ素早さでガラルドが攻撃を仕掛けてくる。斬られるというよりも、潰されてしまいそうなほど巨大な爪を、後ろに跳躍することでかわす。あれを防御するなどありえない。きつと、いくらフィビトだろうがひしゃげて使い物にならなくなるだろう。

超重量級の攻撃に気をとられた隙に、隅っこでひらひらと動いていた物体が、俺の後ろ、死角へと消える。

「くそっ！」

脚に力を籠め、一気に移動する。どちらか一方でも視界から逃したら命取りだ。背後に回られるのだけは危惧しなくては。敵の動きは実にやつかいだった。特に女のほうが、巧妙に俺の背後へと回ろうとするのが実に戦いにくい。普通ならしばらくは動けないほどの攻撃を喰らわせたというのに、女はそんなことは感じさせないほど機敏に動いていた。

三人で、綺麗な三角形を作るような位置へとうまく移動していくが、俺の不利は明らかだ。

回避に専念するだけなら、なんとかなるだろう。でもそれじゃあ、いつか必ず力尽きる。魔力の操作が難しい『雷神』は、かなりの集中力が必要とするから、あまり長時間使うわけにはいかないし、かといって短時間で勝負するには、敵二人の連携がうますぎる。『雷

神』を使う時は、ここぞというときだ。

正直な話、ここは逃げるが吉だろう。ヤマトもとっくに魔王城に着いてるはずだし、もはやここに俺が居る意味はないんだから。しかし、実際に逃走しようとする、敵の巧妙な立ち回りに阻まれる。度重なる戦闘の余波で、周囲の光景は、ここが森の一部だったとは思えないほどに荒れていた。木々がなくなって視界がよくなってしまうため、よけいに逃げづらい。『雷神』を使って逃げようとしたところで、空を飛ぶことのできるガラルドから逃げるのはむずかしいだろう。

「なあ、ガラルド。お前の目的は、ヤマトを殺すことか？」

ガラルドに話しかける。気になっていたのだ。そもそもヤマトが召喚された時、ガラルドはその場に居たはずだ。いくらフレイアも居たとはいえ、結界の中でもヤマトを殺すことは出来たはず。いや、いくらガラルドでも結界の中から、魔王候補を殺して逃げるのは無理か。だが、それにしたって今回の強襲はおそまつ過ぎる。俺たち魔人部隊は、今回の祭りは警戒を強めていた。それは祭りを狙った攻撃があるかもしれないと思ったこともあるが、なによりも、前回のヤマトのレーヴァンティン訪問で、目撃情報が出てしまったからだ。レーヴァンティンでは今、魔王候補の噂が広がっている。そんなことがあれば厳戒態勢になるのは当たり前だし、いくらなんでも強襲する時期が悪い。そもそも、もしヤマトが狙いなら、この強襲はもう失敗で、意味のないもののはず。

「あの魔王候補の少年か。まあ、興味が無いとは言えないが、今用事があるのはお前だ、アギト」

「やっぱりか」

最初からそうじゃないかとは思っていた。女が撃ってきた最初の攻撃、あれは俺を狙ったものだった。ヤマトを狙ったとしたらおかしい行動だし、なによりも攻撃前の殺意が、狙撃するにしてはばれなかった。狙いは俺だと思ったからこそ、あのままヤマトと一緒に行動をすることを避けたのだ。俺を狙うとしたらそれなりの強さを持つ奴が相手だろうし、そんな敵と戦うとすれば、魔人部隊では手も足も出ない。

「それで、一体なんのようなんだ」

どうやら会話に乗ってくれるらしいから、今のうちになんとか打開策を考えねば。

一度喉を唸^{うな}らせると、ガラルドは話し始めた。

「アギトよ。もう召喚された魔王の時代は、終わりだと思わないか？」

「終わりだと？ そんなことはありえない。魔王は何度でも現れるし、俺たちだってそれを望んでいる」

巨大な竜と人魔が話してる光景は、どんな感じなんだろうか。女の位置を確認しつつ、俺は今の状況を整理していた。

「まあ聞け。お前は人魔には過ぎた力を持っている。力こそが全て、お前だってそう思っているんじゃないのか、アギト」

「確かに力が必要なだ。でもそれはお前たちの言う破壊のための力じゃない、何かを護るための力だ」

くつくつく。とガラルドが笑った。低い唸り声にしか聞こえないそれは、耳に響いてひどく不快だ。

「お前の言う護るための力と、破壊する力の何が違うというのだ。アギト、お前には下等な奴らとは違う本物の力がある。数だけの獣魔や、水がなければ何も出来ない水魔とは違う、最強に近づける力だ」

「……いつたい何が言いたい」

「竜王様の下へ着け、アギト」

俺の口から失笑が漏れた。こいつは誰にむかって言ってるかわかってるのか？

「断る。俺はヤマトがなる魔王に忠誠を誓う」

「あんな何も取得^{とじえ}のなさそうな少年に、そんな価値はあるのか？魔王になったとて、所詮『魔眼』に借りる、まがい物の力にたよるしか能がないだろう。『魔王』は本物の力を持つ者になるべきだ。そう、竜王様のような」

少しだけ、ガラルドから感じる圧力が強くなってきた。それにあわせて、俺も身構える。

「ガラルド、お前にはヤマトのいいところなんて、わかんねえだろうな」

ヤマトが召喚されて半年、いろんなことがあった。そして、たくさんのヤマトの一面を見た。

始めのころは、よく目を腫らしていた。きっと、もう帰れないだろう故郷を思って泣いていたんだと思った。でもしばらくして、あいつは魔王城に少しでも馴染むように努力をし始めた。おどおど話しかける様は、なんだか痛々しかった。だから、俺から話しかけたあの時の嬉しそうな顔は忘れられない。それから、あいつから俺に話しかけるようになった。そして、ヤマトが魔人部隊に入ってからは、ほとんどの時間を一緒に居た。

この世界をあいつが知っていくにつれて、俺もあいつのことを知っていた。

だからこそ言える。ヤマトなら立派な魔王になると。人の痛みがわかり、誰かを想う大切さを知っているあいつなら、魔界を平和に導いてくれると。

「最後にもう一度聞こう。竜王様の下につくんだ」

「何度聞いたって答えは一緒だ。そんなもん断る」

答えた瞬間、ガラルドが吼えた。響きわたる咆哮。その轟音は衝撃波となって、周囲の物全てを叩いた。

「予想はしていたが、馬鹿な奴だ。どうせあのヤマトとかいう魔王候補は殺される。無力な小僧など、この魔界ではのたれ死ぬ運命しか待ってないぞ！」

「殺されはしないさ。そのために俺は居るんだからな！」

交渉は決裂。少しだけ稼いだ時間では、結局今の状況を打開する名案は浮かばなかった。

「ヤマトが魔王になれば、争いは強制的に無くなる。それまで護れ

ば、お前たちの負けなんだよ、ガラルド」

「我らがいつまでも下等な人魔の支配下に着くと思うな！　いいか、冥途めいどの土産に一つだけ教えてやろう。お飾りの魔王を倒す方法は、もう見つけてあるんだよ！」

「なに！？」

翼を広げて、ガラルドが跳躍した。翼を羽ばたかせ、上へと加速していく。風が吹き荒れ、砕け散った木の破片が襲いかかってきた。まるで嵐の中にいるようだ。体を覆うように炎の結界を張り、防御してやりすこす。フードの女の姿が見えないが、どうやらガラルドの背中に乗っているようだ。

中空で、ガラルドは静止した。紅い月を背後に、巨大な影が翼を広げている。最強の生物である竜、その口元が、不意に紅蓮の輝きを放ち始めた。赤から青へ、青から白へと、色が変わっていく。地上は紅い光ではなく、真っ白な光に照らされた。

「こいつはっ！」

肌が焼けるような熱が、ここまで伝わってくる。ガラルドが放とうとしているのは、竜魔族最強の攻撃だ。口から吐く炎は、幾千の敵を滅ぼし、視界に入る全ての物を燃やし尽くす。個体数の少ない竜魔が、他の種族から頭一つ出て強いのは、この攻撃を持っているからと言ってもいい。この広範囲の攻撃は、近くに居るならまだしも、この距離では回避不可能だ。

「『雷神』！」

俺の体が、白銀の輝きに包まれていく。生き残るには、ガラルドの攻撃を相殺するしかない！

ファイビトの刃に、魔力を滾^{たぎ}らせる。俺も初めて見るから、相手の攻撃の威力が予想できない。今は全力で、迎え撃つ。

最強の生物の最強の攻撃。それを前にして、俺の口元が再び歪な笑みを浮かべた。力と力の正面衝突。前回ガラルドと戦った時は、この攻撃を見る前に終わってしまった。小細工無しで、互いの最強の技をぶつけあうことを考えると、こんなにも胸躍る。ガラルドにはああ言ったが、俺が力が好きなのは、紛れも無い事実だった。

地面を踏みしめ、体中のばねを使い、全ての力をこの一撃に伝える。

「オオオオオッ！ 貫けっ、ファイビトオオオオ！」

上空に向けて、真っ直ぐ剣を突き上げる。俺の魔力が魔剣の力で増幅され、直線的な雷^{いかずち}となつて放たれるのと、ガラルドが炎を放つのは、まったく同時だった。

目が焼きつかんばかりの閃光が空を翔^かる。あまりの爆音に、まるで世界から音が消えたかのようになった。俺の目に映るのは、視界いっぱいの雷の光と、攻撃の余波で弾け飛ぶ周囲。あまりの出力に、俺を中心に衝撃波が発生したのだ。

雷と炎がぶつかり合った瞬間、世界が震えた。

戦いの結末（3）（前書き）

ひさしぶりの更新です。しばらく小説から離れていたもので、文章がおかしくなってるかもしれないです。

戦いの結末（3）

魔王城のヤマトの部屋、そこにある豪華な寝台の上には、灰色の髪
の少年が眠っていた。寝台の横に座るのは少年を心配そうに見守る
少女、ヤマトを看病するミーナだ。

グレイによって気絶させられたヤマトは、それを知らされたブルド
によってここまで運ばれたのだ。

「ヤマト様……」

ミーナの言葉が、静かな部屋に溶けるように消える。少し前までは
慌しかったここも、今はヤマトとミーナの二人しか居ない。ブルド
は救護班が帰るのと共に、どこかへと行ってしまった。

部屋にある小さな照明と窓から入る紅い月明かりに照らされた室内。
顔を隠すヤマトの前髪を横に流してあげると、ミーナはヤマトの顔
をまじまじと覗き込んだ。

そのあどけない寝顔を見ながら、微笑みを漏らすミーナ。

召喚されたばかりの頃のヤマトを思い出すと、その成長が嬉しい。
いや、きっと成長をしたんじゃないくて、自分がヤマトを知ったのだ
とミーナは思った。

安らかに寝息をたてるヤマトから目を逸らすと、窓へと視線を移す。
魔人部隊が出動してから、もうずいぶんと時間が経つ。アギトや魔
人部隊の力を疑うわけではないが、ミーナには空に浮かぶ月がなん
だか不吉に見えた。

「大丈夫、きつとみんな無事に帰ってきます」

寝台に眠るヤマトと、自分に言い聞かせるようにミーナは呟いた。

（信じよう。それしか、今のあたしに出来ることはないんだから）

両手を胸元で重ね、瞳を閉じて静かに祈りを捧げる。

祈り続けるミーナは気づかなかった。すぐ横で眠るヤマトの体が、ほのかな輝きを放ち始めていることに。

夢を見ていた。

薄ぼんやりとした意識の中、自分の足元を見る。

眼下に広がる紅い月に照らされた光景。ああ、きつと空を飛ぶ夢を見てるんだ。奇妙な浮遊感がなんとなく心地よい。

どことなく視線を彷徨わせていると、視界一面に続く森、その中で素早く移動する集団を見つけた。

僕は体を傾けると、まるで滑り落ちるようにその集団のほうへと移動する。

木々なんか視界に入らないといった風に高速で移動する五人ほどの集団。近づいてみると、それは見知った人物たちだった。

（　　ねえ、そんなに急いでどこに行くの？）

同じ速度で並走しながら、その集団　　魔人部隊の先頭を走る人物
グレイに話しかけた。

だけど、まるで僕の声なんて聞こえないかのように、グレイは真剣な表情のまま前を見据えて走り続ける。

後に続く四人を見ても、誰一人僕に気づく人は居なかった。

ふと、僕は気づいた。

エルリッヒ、オバサ、ウズ、イグノ、そしてグレイ、このメンバーは魔人部隊の中でも得に優れた力を持つ人達だ。そして彼らもまた、

鬼気迫ったような顔をしてる。

なんだろう、なにか良くないことでもおこってるのかな……。

夢の中だと言うのに、僕の心は何か重要なことを忘れてしまったかのような息苦しさに襲われた。

なんだか胸騒ぎがする。

すると、 그레이が何かをしやべった。でも、まるで映像だけで音声
が途切れてしまったかのように何も聞こえない。同じように 그레이
に言葉を返しているだろう隊員の声も、全く聞こえなかった。

なんだか変な夢。

湧き出るような不安を感じつつ、僕はのんきなことを考えた。

まあいい、所詮夢は夢だ。実際に僕がこうやって空を飛んでるなんて有り得ないし、夢の中で何が起ころうと関係ない。

僕は興味をなくしたかのように仰向けになると、瞳を閉じた。

だが、程なくして、僕は異変に気づいて眼を開けた。 まじいた 瞼ごしに感じ
られていた紅い月の光が、不意に強烈な発光に変わったのだ。

そして眼を開いた瞬間、視界を覆うほど巨大な炎に包まれた。

（ うわぁっ！ ）

避ける暇もないほど接近してきた炎は、しかし僕に当たることはな

く体をすり抜けていった。そしてほっとしたのもつかの間、次に僕の眼に飛び込んできたのは、僕を丸呑みできそうなほど巨大な口だった。

あわてて体勢を整えると、僕は一度空へと上昇して逃げた。もう大丈夫だろうと余裕が出来たことで、元居た場所を見る。

（あれは……竜！？）

夢にしては妙に鮮明で驚いた。体を覆う鱗の強固さ、巨大な翼がもたらすだろう推進力、筋肉の盛り上がった腕の先にある爪の鋭さ、そのどれもが容易く想像できそうなほどに存在感がある。さっきの視界一面に写った巨大な口、そこに生えていた何本もの鋭い牙が頭をよぎり、僕は身震いをした。どうやら先ほどの炎は竜の口から放たれたようで、その軌道上には炎の威力を表すかのように地面が抉えぐれている。

そういえば、先ほどまで森の中に居たはずなのに、どうしてこんな場所にいるのだろうか？ 抉れた地面を辿るようにして顔を上げ、僕は息を呑んだ。

（なんだ、これ……）

どうやら木々の途切れた場所にいるの間に来ていたようなのだが、もちろん驚いたのはそんなことじゃない、大爆発でも起きたかのように視界に写る木々が僕を中心に外側へとなぎ倒されているのだ。この光景は、確かにここで何かが起きたのだと分からせるのに十分だった。

そして「大爆発」、それを想像した時、僕の胸が早鐘を鳴らし始め

た。

なんだろう、もう少しで思い出せそうなのに……！

何かなかっただろうか？ 僕の記憶にこの「大爆発」を連想させるような出来事は。

そんな僕の思いは、先ほどの炎の辿った軌道、そのすぐ横に立っている人物の姿を見たたん吹き飛んだ。

白銀に輝く衣を纏った人魔の男。見たことのない格好をしているが間違いない、あれは。

（ アギト！ ）

一気に記憶が蘇っていく。そうだ、僕はアギトの助太刀に行こうとして 그레이 に……。

気絶させられたことを思い出し首筋を触るが、今はそんなことはどうでもよかった。

そうだ、僕は気絶させられたはずだ。ならやっぱりこれは夢？ いや目の前に広がる光景の異常なほどの現実味はなんだ。見たこともない竜を、こんなにも鮮明に想像できるものなのか？ あそこに居るアギトも僕の夢なのか？

思い出すのは、真剣な表情で森を駆けていた 그레이 たち魔人部隊。彼らはアギトを助けにいく途中だったのではないか。

信じがたい現象の前に、僕は頭が混乱しそうになるのを抑えるのに精一杯だった。

もしかして、これは現実起こっていることを僕は見ているんじゃないか。ということはこの巨大な竜こそが 敵！

グオオオオオオオオオ！

無音だった世界が、急激に音を帯びていく。まるで夢から覚めたかのような感覚。いきなり聞こえるようになった竜の咆哮に、僕は腹が冷えるのを感じた。

なんて威圧感、そこにいるだけで圧迫されているような気持ちになる。

そうだ、これがただの夢のはずがない。鼓膜を揺らす振動が、そしてなによりもこの竜の存在感が、全てがこれは現実だと訴えている。竜が、その巨大な翼を羽ばたかせた。それだけでゴウツとつむじ風が巻き起こる。

殺されるっ！

そう思った僕の予想とは裏腹に竜は僕の存在に気づいていないように、真っ直ぐアギトへと向かって飛翔した。僕は気づかれていない事に安堵すると共に、アギトの身に迫る危険に大声を上げた。

（アギト、逃げて！）

もう僕はこれをただの夢だなんて思わなかった。

巨大な竜にアギトが押しつぶされる、そう思った瞬間白い閃光が走った。そのあまりの素早さに、僕は眼で追うこともできなかった。光の終着点に忽然と現れたアギト、そしていつの間にか竜に刻まれた切り傷。すれ違い様に斬ったとわかるのに一瞬時間がかかった。しだいに心を満たしていく歓喜。

勝てる！ アギトは竜よりも強い！

そう思い、喜び勇んでアギトの近くへと移動した僕は我が目を疑った。

白銀に輝く衣、その合間から覗くアギトの体には、夥しいほどの出血。それに、ひどい火傷をおっているみたいだ。あれほど力強かった肉体は小刻みに震え、アギトは明らかに窮地に立たされていた。

「はあ…はあ…ぐっ！」

どばあっとアギトの口から血液が吐血される。

僕は目の前のことが理解できなかった。アギトの口から吐き出された液体はなんなのか、脳は全力で思考してるはずなのにその全てが空回りしている。アギトが倒れるように方膝かたひざを地面につけるまで、僕はただ立ち尽くしていた。

（アギト！）

剣を地面に突きたてかろうじて倒れていない状況のアギトに呼びか

けるが、僕の声はやはり届かないようだった。

「どうやら、そろそろ限界のようだな」

ひどく重低音の響く声が、竜から発せられた。地面を揺らしながら、ゆっくりとこちらに向かって歩いてくる。

「我々を相手にお前はよくやったよ」

「我々」、その言葉に疑問を持つよりも早くもう一人現れた。フードに隠れて顔が見えないが、言葉から察するにどうやらこの竜の仲間のような。その人物は油断なくアギトの背後へと陣取った。

二対一なんて卑怯だ！ そんなことを叫んでしまいそうになる。実際に口にできなかったのは、近づいてきてよく見えるようになった竜の体もまた、アギトにやられたのであろう傷によってぼろぼろだったからだ。

いつのまにか僕の両目からは涙が流れていた。アギトは最強だと思っ
ているのに、言葉とは裏腹に今の状況が好転すると信じれないからだ。竜からアギトを護るようにと立ちふさがる。相手には見えていないということを知りつつも巨大な竜を睨み上げるしかない自分が、果てしなく無力に思えた。

「だがそれも終わりだ。お前は死に、あの魔王候補の少年も殺される」

冥途の土産だといわんばかりに話し始めた相手に、ぎりぎりと僕のくいしばった歯が軋む。

悔しい。どうして何も出来ないんだ。僕はここに居るのに。目の前にアギトを殺そうとしている敵が居るのに！

すると、搾り出したような小さな声で、アギトが答えた。

「ヤマト…は…殺させねえし、俺も…あいつが魔王になるまで…死ねねえ……」

弱々しい声。

どっからどう見てもぼろぼろに傷ついた体。

なのに、なんで……。

アギトの竜を睨む鋭い眼光は輝きを失ってなく、口元にはいつもと同じ不敵な笑みがあつた。

「その状態のお前に何が出来る。アギトよ、お前はここで死ぬ」

竜はその視線をアギトからはずすと、フードの人物に移した。

「約束通り、お前がこいつを仕留めるがいい。その間、私は邪魔な虫を排除することにする」

ギョロリと瞳が動く。

つられて振り向いた僕の視界に、高速で近づいてくる複数の影が映った。

戦いの結末（3）（後書き）

これからちゃんと更新します！
すみませんでした！

戦いの結末（４）

地を這い、獲物を狩る獣のように近づいてくる存在。

「散っ！」

小さく切れの良い掛け声が微かに聞こえた。同時に僕らを囲むように散開する複数の影。

迎え撃つように翼を広げる竜。

脳裏に浮かんだのは森で見たグレイたち。急ぎ足で移動していた彼らの目的はアギトの救出に決まっている。

それは紛れもなく『希望』だった。どうしようもない状況に思えた場面に現れた彼らは、まさに絶望を蹴散らす 救世主。

五つの影は、同時に攻撃を放った。

だけど、そんな僕の期待とは裏腹に『運命』が動き出す。

また、音が聞こえた。

いつか聞いた音。

歯車が、軋みながらも着実に廻る音。

気づけば僕の前に一人の少年がいた。
前髪に隠れた瞳が僕を見据えている。

どうして目の前に少年が居るのか。周囲の状況はどうなっているのか。そんなことは忘れてしまったかのように、僕は意識はその少年に釘付けになっていた。

夢に見た姿そのままに、鎖で束縛された少年。

病的なまでに青白く不健康そうな肌に、血のように赤いその唇と瞳がひどく印象的な少年。

『瞳に刻んで。これから起こる光景を忘れちゃいけない』

少年が言葉を紡いでいく。

『君は何も知らない。でも、世界は君を軸に廻る』

それは弱々しい声。切実に訴えかける声。

『歪みすぎた世界は正されるべきだ。それは誰でもない、君にしか出来ないこと。世界を知ってほしい。そして、想ってほしい。世界はもう一度創造されることを、在るべき姿になることを望んでいる』

僕の意識は、吞まれていくように少年の赤い瞳に集中していった。

『偽りの魔王の時代は終わる。世界は終わり、そこから始まる。支配から破壊へ。破壊から再生へ』

何の話をしているのか全く理解できない。でもきっと、とても重要なことを伝えようとしているんだと思った。

『伝えたよ。それじゃあさようなら。【始まりの魔王ヤマト】』

最後に顔を上げて真っ直ぐに僕を見た少年。前髪で隠れていたその額には、第三の瞳が紅く輝いていた。

止まっていた時間が動き出したかのように、僕の意識は周囲を認識し始めた。

そして目に映ったのは、巨大な竜のその爪にひっかかるようにして力なくうなだれる人魔。もう用なしとばかりに、それは乱暴に捨てられた。地面を転がり僕の足元で止まったそれは、もう光を失った虚ろな目で僕を見上げた。

（……っ！　ウズ！）

反射的に目を逸らすと、そこには同じように虚ろな瞳で僕を見上げる存在が。

（エルリツヒ！）

さっき見た力強く走っていた姿と、今見てるその姿が交互にフラッシュバックする。

（ああ……ああ……アアアアアッ！）

それは始まりにすぎない。

竜の背後から、イグノが斬りかかる。剣に炎の魔力を籠めた渾身の一撃であろうそれは竜の翼を僅かに切り裂き、その代償にイグノは振り下ろされた強靱な腕によって地面へと叩きつけられた。地面が揺れるほどの威力。イグノがどうなったか、想像するに容易い一撃。そして、立っているのは巨大な竜ただ一体になった。

残りの隊員はどうなったのか。そんなことを考える余裕もなく、僕の視界はただただ現実を映し出す。

運命は大きな波のように、この世界を飲み込んでいく。

気づけば、僕は駆け出していた。なるべく体勢を低くして、無我夢中で竜の元へ向かう。なにも出来ないことはわかってた。でも、なにかしなくちゃと思った。

強く地面を蹴り、拳を握って振りかぶる。そして、僕と竜の目が合った。

金色に輝く、爬虫類特有の瞳。

体が硬直する。

だけど、竜が見ていたのは僕じゃなかった。僕の胸から生えてくる剣。続いて手、腕。期せずして、僕の体は 그레이の体と重なっていた。その瞬間、爆発的に高まる感情。憎悪、怒り、殺意、そして一筋の冷静さ。まるで、感情が僕に流れ込んでくるかのようなだった。いや、その瞬間、確かに 그레이の感情が流れ込んできていたんだと思う。なぜなら、 그레이の考えていることも、手に取るようにわかったからだ。息を潜め隠れていたのは、この瞬間の為。この竜さえ一時でもどうにかすれば、アギトならなんとかしてくれるという信頼。荒れ狂うような激情とは別に、 그레이の理性は自らのやるべきことを冷静に計算していた。

だから、この後のことも 그레이はちゃんと理解していた。

紅い月の光よりもなお赤い光景。

体が震える。

何も僕に触れることが出来ないこの状況に、心の底から感謝した。

何も触れないこの状況が、心の底から悔しかった。

何もかも終わって、後に残ったのは夥^{おびただ}しい血痕に彩られた惨状だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2632e/>

魔王な少年

2010年10月9日06時03分発行